

---

# リリカルなのはStrikerS 己の拳にかける道

nukosan

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのはStrikers 己の拳にかける道

### 【Nコード】

N6669S

### 【作者名】

nukosan

### 【あらすじ】

主人公は、転生者だが魔力はほとんど無し。しかし、ありふれたボクサー能力と全日本Jr.の持つブローで明日を切り開く！できるかどうかは作者しだい

## 主人公設定「改」(前書き)

これが、小説初挑戦にして、初投稿なので今後ともよろしくお願  
いします。

????「こんなんでだいじょうぶか?」

作「まあなんとかするさ」

## 主人公設定「改」

名前 真田 竜児  
年齢 転生前16歳 修業後17歳 転生4年後21歳

身長 165cm

体重 53kg

容姿・性格 容姿は、黒髪黒目で日本人。イメージは、リングにかける1の主人公高嶺竜児。性格は基本楽観的だが戦闘は真面目で隙を見せることがない。

詳細 この物語の主人公にして転生者。しかし、魔力ランクがほとんどないために時空管理局では、実質お荷物扱いである。だが、転生前の世界では、ボクシングをしていて高校インターハイの優勝経歴を持つのでセンスがあり更に神に願うことで、リングにかけるの登場人物である全日本Jr.の持つブローを手に入れた。よってガシエットはパンチで破壊できる。

趣味 料理・格闘技

魔導師ランク 総合D できるのは念話とソニックムーブと身体強化ぐらい。

使える必殺ブロー

ブーメランフック

アメリカで生まれた伝説のコークスクリューブローでのフック。絶大の威力を誇る。

ハリケーンボルト

跳躍し真上から全体重を拳にのせ相手に落とす。

スペシャルローリングサンダー

0・0何秒間に5回のパンチを繰り返す。

ジェットアッパー

低音部から高音部へ一気にかけのぼるようなアッパーでまるでジェット機のように低空から鋭く打ち出される。

ギヤラクティカマグナム

風圧だけで銃弾を放ったような威力を発する。

神技的ディフェンス

紙ひとえで相手のパンチをさけ、見た目にはパンチがすり抜けて見える。

固有結界 <sup>リング</sup> 魔力EX

孤高の決闘場

何も無い場所にボクシングリングを出現させることができる。そこでは、1対1の戦いをしなければならない。だがそれは人間などの場合により、ガジェットなど機械的なものには1対多数の戦いができる。ルールは、武器は何を使ってもいいが、KOやTKOは相手の自動的な敗北となる。維持は竜児の精神力次第である（この維持の仕方って一種のご都合主義だね（笑））

デバイス リーヴスラシル（略）リーヴ

神様からもらったデバイスで主に竜児のサポートをしている。

インテリジェントデバイスであり竜児のことは「マスター」と呼び

自分のことは「私」などと呼んでおり結構冷静である。意味は、神の心臓

## 主人公設定「改」（後書き）

竜「なんでしようとおもったの？」

作「いや、リンかけをみてたらつい」

「まあいいか」

「軽いな！おい！！」

ということでもこんな感じで進めていきます。作者は原作知識は微妙ですが頑張っけていきたいと思えます。感想や、質問があればどんどん送ってきてください。よろしくお願ひします。

すみせんかなり変えました。

## プロローグ(前書き)

記念すべきプロローグです。

## プロローグ

新暦0075年4月末期ミッド臨海空港にて大規模な火災が発生した。

???side

???「お父さん、お姉ちゃん」

私は燃え盛る火の中を一人でさまよっていた。

まわりに見えるのは炎ばかり。そこに真横からの爆風でよろけて倒れてしまった。

「痛いよ、熱いよ、こんなやだよー、」

叫んでみても誰にも聞こえない。今、私の中にあるのは心の中の絶望感だけ。

「転んだまま立ち上がることができなかった。そこに銅像が落ちてきた。」

「はっ！」

気づいた時にはもうだめだと思った。

????「危ねーー！」

この声を聞き助かるまでは。

竜 side

竜「ここはどこだ？」

確か俺は、明日がボクシングのインターハイ決勝だからはやめに家に帰ってそれから飯食って風呂入って寝たはずだよな？だとしたらこれは夢か夢なのか！いやそれにしてもここかなり暑いなってなんだよ周り火だらけじゃねえかよ！とにかく出口を探さなきゃならねえな。あれ何で俺グローブなんてつけてんだしかも右手だけに。

「まっいつか」

と自己完結だけして俺は歩き出した。

お！ちょうどあそこに誰がいるぜ。話きいてここがどこか聞いておこうとしたその瞬間後ろの銅像が落ちてきた！てっ

「危ねーー！」

そう叫び俺はその子のもとにダッシュでかけつけてその銅像をアッパァで叩き上げた。

「はあはあ・・・おい大丈夫か？」

「????」「・・・は、はい大丈夫です」

はあ〜よかった〜。この子に大事がなくて。

「????」「あ〜」

「ん？あ！俺の名前は真田竜児。君は？」

「私は、ス・・・スバル・ナカジマです」

「ふうんスバルか〜いい名前だな」

「あ・・・ありがとうございます」

「ところでさここと（あの！だいじょうぶですか！）こ？」

げえ場所聞く前にさえぎられたよう誰なんだと思いつつ上を見上げると。

なのは「よかった、助けに来たよ」

白い天使がいた。

「本当に大丈夫ですか？」

「ああ、俺は平気だけどこの子がだいぶ怪我してて」

俺はそう受け答えすると彼女はあの子のもとに行き

「よく頑張ったね、もう大丈夫だよ。安全な場所まで一直線だから！！レイジングハート」

「yes, my master shooting mode」

といい、天井になんかしやべっている杖をむけて光をためていた。  
ん！光イ！！

そして

「デイベイーン……」

まさか……

「バスター……！！！！」

うわ〜ぶっ放したよこの人天使みたいな姿だけどやること半端ねえ

「あの〜」

「あ、はい！」

俺が放心状態でいるときいきなり話しかけられた。でも

「救助でしたらこの子を先に救助してください」

「あ、はい私はこの子を救助隊に引き渡してきます。すぐ戻りますので待っていてください」

「分かりました。あ、でもその前にとおい、スバル」

俺は同じく放心状態であろうスバルに話しかけた。

「あ、はい！」  
「このグローブをスバルにやるよ」  
「えっ、でも」  
「いいの、いいの。それは出会いの証ってやつだから」  
「あ、ありがとうございます」  
「救助さん後はよろしくお願いします」  
「分かりました。じゃ、行こう」  
「はい！」

と言って救助さんたちは飛んで行った。さてこれからどうしようかと考えてると

「あり？」

か、体が消えていく！！やばい俺このまま消えるのかいやだ、いやだ

「いやだーーーーー！！」

あれ？あれあれ？

「なんだ夢か・・・でも妙にリアルな夢だったな。さて準備でもして行くかってあれ右のグローブがない」

まさか・・・本当にあれは夢じゃないのか？

「まっいいか。そんなに気にすることもないだろう」

ってそうじゃない誰かにグローブ借りないとやばいことになる。と  
いうことはさっさとレッツゴー！。急げーーーーー！！



## プロローグ（後書き）

はいということでも長くなりそうなのでここでいったんきります。  
本当に感想や質問など待ってますのでどんどん送ってきてください。  
では！また次回！！

## プロローグ2（前書き）

もう少し続きます

## プロローグ2

ここはとあるボクシング会場

実「さあ！今年のインターハイアマチュアボクシング個人戦もいよいよ決勝戦を残すのみとなりました」

ふう、何とか間に合ったぜ。え？グローブはどうしたかって。実は、コーチに借りれたことは借りれたけどコーチが厳しい人でさ」

コーチ「借すのはいいが絶対勝てよ」

って言うてきたからには絶対勝たなきゃな。おっと、そろそろ試合開始だな

コール「ただいまよりアマチュアボクシング個人戦バンダム級決勝戦をおこないます。赤コーナー神風高校所属、鎌田則昭！！」

観「うおおおお！！！」

「青コーナー龍神高校所属、真田竜児！！！」

「頑張れよー！！！」

「さあ、鎌田君の2連覇かそれともそれを阻止して初出場・初優勝となるか真田君！！！」

さあ行きましようか！！！！

作者 side

ここからは、実況もお楽しみください。

実況「さあ、ついに始まりました。インターハイ個人戦決勝まずは両者コーナーを回りつつも間合いをはかっています。さあどちらが先に動くのか。」

竜「まずは」

真田が左ジャブを繰り出す。

「おおつと真田君、左を打ってきた」

鎌「ふつ、甘いな」

「しかしこれは簡単によけられた」

「まだまだー！」

「真田君！！果敢にも左をくりだしているぞー」

「ちっ、奴の左は速射砲か何かか！」

「鎌田君！！それをことごとくブロックしているー！」

だがガードが上がってきているが、ボディが空いてきている。そこを逃さないのが真田である。



s i d e 竜児

コーチ「よくやったぞ」

俺はコーチの言葉も耳に入らず自分の右手を見ていた。

「ん？右手がどうかしたか？」

竜「いえ、何でもありません」

「そうか。だったら次のラウンドで決めてこい」

「分かりました」

おかしい。右手の感覚が微妙に変だ。まさか！あのときに。いや、それはないはず、でもあのなくなったグローブや実際に話ができたことはどうなるんだ？やっぱり何かおかしいな？

「セコンドアウト」

ん？ああ次のラウンドが始まるのか。まあ気にせずに行こう。このラウンドでK・Oだ！

s i d e 鎌田

あいつ、1年なのにかんりの強さだ。どうすれば？ん？あいつ右手  
なんか見て・・・そうか！あいつは右手に何らかの故障があるはず。  
よしそこをつけば。

side 作者

「さあ第二ラウンドの開始だあ！」

ゴングと同時に鎌田が飛び出しジャブを繰り出す。

「おおっと今度は鎌田君が飛び出したー！！！」

「くそ！」

「真田君も負けんばかりとジャブを繰り出す。打ち合いだー、リン  
グ中央で撃ち合いをくり広げているぞー！！！！！」

「よしそこだー！」

「真田君、ガード上からでも躊躇のない右ー。鎌田君、後方へふっ  
とぶー！」

いけると思った真田の右こぶしに痛みが走る。

「っ！」

(ふっ、やはり思惑通りだったか。奴は右が使えまい！)

それをチャンスと言わんばかりに一気に責め立てる鎌田。

「そろそろそろ」

「くそ、このままじゃ」

ガードがだんだんと下がってくる。そこにおそいかかる鎌田のアップー。

「まずい」

「もう遅い」

ドーン！！

「鎌田君のアップーがヒット！！真田君、宙に浮きあがった」

「これでK・Oだ！」

そこに渾身の右ストレートを放つ。

「ダウン！！」

「真田君ダウン！これは絶望的かー！」

side 竜児

「One Two Three・・・」

「な・・・なんだ。俺、ダウンしてしまったのか。」



ブオーン！真田の最後の左は空振りだったなげなら。

「ダウン」

相手がダウンしてしまったのだから。

「One Two three・・・」

レフェリーが手を挙げ交差している。カンカンカン！

「K・O！！真田君、劇的な逆転K・O勝ちです」

「よっしゃー！！」

優勝だーーーー！！

帰り道・・・

「これでインターハイを優勝したから後は国体と選抜大会を制覇すれば高校3冠だ。さあつてと帰って寝るかあつてあれはなんだ？」

俺は茂みの中にきらりと光る宝石みたいなのを見つけて拾った。この後何が起きるかもとも知らずに。

「なんだ？これは誰かの落とし物か？まあ拾っておくか。てっ、う  
お！」

いきなり宝石が輝きだし

「うわーーー」

輝きが収まるとそこには誰もいなくなっていた。

## プロローグ2（後書き）

はやて「作者さん」

作者「うおー！はやてさん何の御用でしょうか」

「私らの出番はいつなんやろかいな」

「後2、3話？ぐらい待ってください」

「そんなにかかるんかい！まあこの作者やからなああってなんで、  
がついとんねん！

」

「お、さすがに関西弁だけあるな。ノリ突込みがさえてるぞ」

「ありがとうございます」

「褒められた感じがしねえ」

「（ギクッ！）まあ、とりあえずはよう本編に出させてや」

「わかりました」

「あ、後これりりなの出演組の頼みやからそこらへんもおぼいとき  
や」

「な、なんだって……！」

## 第零話（前書き）

ようやく物語が動きます。長い） - ” - （

## 第零話

ここはどこだ？周りを見まわたしてみると見えるのは、

右・・・真つ白

左・・・真つ（ry

上・・・真（ry

下・・・（ry

後ろ・・・（ry

前・（r！！！土下座をしている女のひと。

ん？女のひと！！なんで土下座してんの？とりあえず話を

????「すみませんすみませんすみません・・・」

は、話ずれー！くっ、勇気を出せ、俺！

竜「あ、あのう何で誤ってるのでしょうか？」

「あつ！すみませんすみませんすみま（あやまらなくてもけっごうですよ）そうですか？」

「それで、なんで俺はこんなところにいるのでしょうか」

女のひと説明中・・・

「つまり、あなたは神でこの統制管理をしているが天界と魔界が争いだしてここにまで影響をおよぼしてしまいこの戦いを終結させるためにここではない場所で何かの適合者を探そうとしたがその物がなくなってしまう探しているところで、俺をここに連れてきてし

まったと。こんな感じですか」

「はい、おっしゃる通りです。」

「で、もしかして探し物はこれですか？」

「あーそう、それです！見つけてくれたのですね！ありがとうございます」

「へえ、これがそんなに大事なものなのかねえ」

俺は、さっき？拾った宝石を見つめていると

『Yes, my master』

「うおー！しゃべった」

「うそ！今までこんなことはなかったのに！」

神が何かを考えていると

「あの一！」

いきなり、神が大声を出して俺は少し引く。

「お願いがあります。世界を救ってください」

「へ？」

そんなことを言われても困るぞ。

「どういうことですか？」

とりあえず理由を聞こう。話はそれからだ。

「実はさっきの話には少々間違いがあります。争いはもう終結して

いるのです」

えっ！それだったらもういいんじゃないのか？

「そういうわけにもいきません。勝ったのが魔界のものなのでその魔界に跪いた神々もいるのです。更に魔界側は、天界を侵略していきあまつさえほかの世界をも侵略しようとしているのです」

他の世界にも！でもそれは俺の世界には関係ないことじゃ？

「いいえ、あなた方の世界もいずれは侵略されてします」

おいおい、まじかよ

「なので、それを止めて世界を救っていただきたいのです」

こんなに真剣に頼まれるとはな。

「ふう。わかった」

「本当ですか！！」

「ああ。俺にはかなり荷の重いことだろうが、自分の世界までとなると黙っちゃいらねえ」

「あ、ありがとうございます」

「ところでなんか力とかもらえねえかな？さすがにこのままじゃ戦えねえしな」

「わかりました。あ、でも魔力の増幅とかはできませんよ」

魔力？なんだそりゃ？まあいいか。

「じゃあ『リングにかける』に出てくる全日本Jr.の必殺ブロー

をくれ」

「わかりました。でも出し方の理念ぐらいいしかインプットできませんよ」

「それでもいい。後ここで修業させてくれ。必殺ブローやこいつの使い方を完ぺきにしろ」

「はい」

これでいい。

「それではここを通れば修行できます」

「そういえばあんたの名前を聞いてなかったな。俺の名前は真田竜児」

「私の名前はアテナです。」

俺はその名前だけ聞いて目の前の門をくぐった。

1年後・・・

「キングクリムゾン!!!!!!」

『あの、いきなりどうしたのですかマスター?』

「ん? ああ、リーヴか。今は気にしないでくれ」

なんか言わなきゃならなかったただけだどなぜだろうか?

すいません作者には修行風景を描くほどの文才はありません。by  
作者

「帰ってこられたのですか」

「おう！ほとんどは叩き込んできたぞ！もう準備は万端だあいつらが最初に侵略するところはどこだ？」

「それはリリカルなのは世界で、これからまだ5年ほど時間があります。なので、あなた方の世界で言うStrikersという物語が始まる4年前に起きた空港火災の1か月後に飛ばします」

「わかった」

じゃあ、世界とやらを救いに行きますか！

そして竜児は歩き出した。世界の命運をのせて。

「いってらっしゃい。できればあなたに幸運が巡りますように」

## 第零話（後書き）

次回、修業後ステータスです。

## 主人公設定2（前書き）

思った・・・これまじ強！！

## 主人公設定2

修業後・・・

筋力SSS(A)

耐久SS-(S)

敏捷EX(AA)

魔力D(無)

幸運A(B)

宝具EX(無)

孤高の決闘場<sup>リング</sup>EX

リーヴセットアップ時の格好

リングにかけるの日本Jr.が着ている試合時の格好に。手には聖闘士星矢の手甲をしている。

身につけた技

二段ジャンプ

ジャンプして最高点についたら足に魔力を集中させてもう一度飛ぶ。

そこからハリケーンボルトにつなぐことも可能。

真空パンチ

パンチによりかまいたちを発生させ、10m先まで攻撃することができる。

主人公設定2（後書き）

次回、竜児無双

第一話（前書き）

竜児無双劇開始！

## 第一話

ミッドチルダ郊外

「ふう、ここがミッドチルドか。リーヴここから一番近い町は？」  
『東を1km行ったところに町があります』

1kmねえ。よし！ちょうどいいし走っていくが。

首都クラナガン

何とか町までついたな。さて、ここからどうしようかな。ん  
？なんだあの人ばかりは？少し話でも聞かか。

「あの。これは今どうなっているのですか？」

「ああ。今その銀行で強盗事件が起きて犯人グループが人質を取  
つて引きこもってるらしい。おかげで管理局も動けずじまいだ」

管理局？この世界の警察みたいなものか？

『マスター、どうします？』

「もちろん行く。試したいことがあるしな」

最初の犠牲者はあいつらだ。

side 作者

その後竜児は銀行の裏口から中に潜入し犯人のところにとどり着いた。

(見たところ犯人は2〜3人ほどだなそのうち1人が人質を取っている形だな。そして警察らしき人もいない)

犯1「おらおら！はやく要求した物を出さねえとこいつらがどうなるか知らねえぞ」

犯人達は、竜児のことにはまったく気づいていない。

(よしまずはこれで)

竜児はどこからか拾ってきた手ごろな石を投げつけた

「っ！な、なんだ、グエ」

そして犯人が後ろを向くと同時に顔面を殴りつけ気絶させた。

side 竜児

よしまずは1人目。

犯2「な、なんだてめえは」

犯人どもがなんか言ってるような気がするが気にしない

竜「さあ！パーティのはじまりだ」

そついつて俺はさらに飛び出す。犯人の1人がこっちに向かってくる。

犯2「オラー」

「よつと」

俺はそれを軽くよけ、

「それがパンチか？パンチはこうするもんだろ！」

そついつてそいつの腹に強烈なボディをくらわせて気絶させた。

犯3「このやろう！！グベエ」

もう1人がナイフを刺してきそつになったが真正面からだったので簡単にカウンターを合わせ気絶させた。

ふう。これでおわ「危ない！！」

「ん？グワッ！」

いきなりの攻撃に俺はとっさに反応できずに右肩に直激した。

「????」ほう、一瞬とはいえ俺の魔法攻撃をまともに受けなかったな」

魔法？さっきの攻撃が魔法だったのか！

ルイブ「俺の名前はルイブ・シューツラント。お前は我々の計画を邪魔したので俺が殺してやる」

「へえ。犯罪者のボス自らが相手とは光栄だね。でもさっきの奴はもうきかないぜ」

「な、何！？フツ何を言うと思えばもう負け惜しみか？ならばここで死ね！」

右腕は今使えねえ。だったら！

「ボルト・ランス！！」

へっ！撃ってきやがった。いくぜ

side 作者

ルイブ「ボルト・ランス！」

ルイブがやり形状のものを作り竜児に投げつけた。だが竜児は当たる直前によける神技ディフェンスを発動しその攻撃を避けた。

「ど、どこだ!?!」

竜「ここだー！」

竜児は一瞬でルイブの前に移動して

「スペシャルローリングサンダー!!!」

わずか0コンマ数秒の間に、左腕のみで五発のストレートを繰り出し五つの急所を貫くスペシャルローリングサンダーを放った。

「グワーあ!!!」

ルイブが吹っ飛びこれで終わったかと思っただが。

「ま、まだまだ」

「ゲッ!まだ立つのかよ。渋てえなあ」

『おそらく彼がしているバリアジャケットのおかげで耐久も上がっているでしょう』

「ふん。じゃ俺たちもするかリーヴ、腕の部分展開を頼む」

『わかりました』

「最後はあれで行くぞ」

俺は、走り出した。

「くそ!!!お前らみたいな一般人に負けるような魔導師じゃねえん

だぞー!!」

「おまえ、俺の右腕じゃなくて左腕を使えなくしてくんだつたな。ボクシングじゃ左を使うやつはこう呼ばれてるんだぜ。『左を制するものは世界を制す』ってなーー!!」

「ひっ!」

「うなれ!ブーメラン!」

このブローを見ていた人はのちにこう言った。

「あのととき閃光のようなブーメランを見た」と。

結局、ブーメランを放った後ルイブは銀行の外まで吹き飛ばされそのまま逮捕。ほかの犯人どもも同様の扱いとなった。そして竜児はとうとうと

「本当にありがとうございました。このお礼なんと申し上げてよいのやら」

などと言われ離れることができなかった。



## 第一話（後書き）

作者「どうだった？魔法を見た感想は」

竜「うん、まあすごいとしか言いようがないね」

「でもお前のブローも下手すりゃ魔法の域だぞ」

「そ、そうなのか！」

「しかもそろそろ原作開始だしな」

「そうだな。ま、頑張れ」

「頑張ります」

みなさん。感想や指摘する点などございましたらどんどん送ってください。

## 第二話（前書き）

ミゼット提督の性格がわからないので、作者の想像で描いてみました。

これでよかったのかな？

## 第二話

?????side

今、私はとても驚いている。なぜなら一般人ともいえるあの子が犯罪者といえど魔力量B以上はあるであろう魔導師を倒してしまったのだから。しかも左手一本で・・・

あれは、ちょうど銀行に入った瞬間だった。

「全員、手を挙げる！！」

いきなり石が飛んで来たのかと思ったら犯人が入ってきて中は緊張状態となった。そして何分か後

「っ！な、なんだ、グエ」

いきなり石が飛んで来たのかと思ったら犯人が1人氣絶していた。ふと顔をあげたらそこには1人の男の子がいた。その子は飛び出していき、一気に2人を気絶させた。その子が安心してると、そこに魔法攻撃が飛んできた！

「危ない！」

そのとっさの叫び声に反応して右肩だけに当たっていた。

(あの子、あの一瞬で体を反らしていた。もし、反応していなかったら)

たら確実に重傷ものだったわ)

しかし、あの子は笑っている。そして

「さっきの奴はもうきかないぜ」

と言っていた。どういうことなの？と考えているとあの魔導師が攻撃してきた。しかし、あの子は当たると思った直前によけてしまった。

(どういうこと？今のは魔法なの？でも術式を立ててる様子は全くなかったわ)

私が二度考えているとあの子の腕が光ったと思うと

「スペシャルローリングサンダー!!!」

そう叫び攻撃して吹き飛ばした。

(今のは何発殴ったのかしら?)

これで決まったかと思ったがまだ立ってきた。しかし次の瞬間!

「リーヴ、腕の部分展開を頼む」

デバイスらしきものを取出しセットアップしたかと思えば腕の部分しか展開していなかった。そしてまたも走り出し

「おまえ、俺の右腕じゃなくて左腕を使えなくしとくんだったな。

ボクシングじゃ左を使うやつはこう呼ばれてるんだぜ。『左を制するものは世界を制す』ってなー！ー！！」  
(ん？何を言っているのかしら)  
「うなれ！ブーメラン！！」

そう叫んだ瞬間・・・確かに見た・・・

ブーメランという名の龍を・・・

竜児 side

俺は、あの後かなり感謝され困っていた。ここはひとつ

竜「あの、急いでののでまた今度」

俺は来た道を戻ろうとすると

????「少し待ってください！！」

いきなり止められた。仕方ない

「はい、なんででしょう」

「右肩をけがしていますね。病院まで連れて行きますよ」

「え？いや大丈夫ですよこのくらいホラっ」

俺は軽く腕を回してみるが

「痛っ！」

激痛が走った。

「ほら、そんなに痛がっているではないですか。さあ行きますよ」  
「・・・分かりました」

そんな感じで外に出ると

同員「あ、お、お疲れ様であります！ミゼット提督」

ミゼット「はい、ご苦労様」

（えっ、提督？この人そんなにすごい人なの？）

そう考えながら俺は歩いていった。

そして・・・

俺は、あそこから少し離れた、聖王医療院に運ばれ治療を受けて今はベッドの中である。そこにさっきの婆さんが入ってきた。

「あ、さっきはどうもありがとうございました」

「ふふ、どつってことはないわよ。それでなぜあんなことをしたのかね」

俺は、事のいきさつを話した。まあ一部は嘘だけど。

「ふーん。ということは、あなたは次元漂流者で住むともなければ親もいないのね」

「はい、おっしゃる通りです」

そっだ、俺には親がない。

「いいわ。そしたらあなた私の養子になって管理局で働いてみない？」

「へ？いいんですか？でも管理局というのは？」

「管理局はね・・・」

管理局について聞いたが正直あまり良い印象はない。なぜなら立法・行政・司法をすべて一つにまとめているのだから。普通ならばこの三つは均衡でなければならぬのだが、それを一つにまとめること確実に戦争や、内乱が起こる。しかし管理局は、それを避けるために優秀な魔導師や魔力量の高い子供までも働かせていて更に他の世界の管理まで行っている。そのおかげで内乱などが行われていないという。

しかし、実際に事件が起こっているのだから完璧に管理はされてはいない。管理が行き届いていないのに他の世界の管理とは、阿呆らしいな。この分だと違法研究とかもされてそっだな。だが、ここ

で断ると

生活できないのも事実で俺も捕まるかも？・・・仕方ない

「分かりました。お婆さま」

この申し出を受けるとしよう

「ふふ、分かったわ。でも、もう少し軽めに接していただけるかしら」

こうして俺は管理局員となった。

あれから4年物語が動き出す。

## 第二話（後書き）

次回、いよいよ原作組が登場する！かも？

はやて「なんでまた、？が付くんや！！おかしいやろ」

作者「いや、気分？」

「ほぐう、そんなに作者は終焉の笛がくraitainか？」

「いえっ！滅相もございません」

「ほんならはよう本編にだしい。そしてわたしをそのままヒロインにしいや」

「???」ちよつとまった（なの）！！」

「だ、誰や!？」

なのは「作者さんヒロインは私だよね！」

フェイト「いいや、あたしだよね！」

はやて「何言ってるんや2人も。いくら親友でもこれだけは譲れんで！」

ガミガミガミ・・・

ええー隊長3人組が言い争っているうちにアンケートを開きます  
内容はスバル・ギンガ・エリオの魔改造についてです。次のうちか  
ら選んでください。

？・全員やってしまえー

? スバルとエリオだけ

? スバルとギンガだけ

? スバルのみ

? ギンガのみ

? エリオだけ

? エリオとギンガだけ

? 誰にもするなー

以上8個の中から1つ選んでください感想欄に書いてくれるとうれしいです。後

この子をヒロインにしてーという要望もあれば書いてください。

締切は、無しとします。(作者の気分しだい)たくさん送ってくださるとうれしいです。

よろしく願います。

第三話（前書き）

ようやくできました

## 第三話

あれから4年後：

俺が管理局員兼婆ちゃんの養子（名前は変わってないけど）4年・  
・本当にいろいろあったな。最初の頃は、陸戦魔導師としてやって陸士105部隊に入隊してたけど魔導師ランクがDだっただけでわかってほとんどお荷物状態だったんだよな。しかもこっちでの格闘技はストライクアーツと言って、基本がパンチとキックだったけど基本だけ教わって辞めたなあ。だって俺もともとボクシングやってたから他のとこっちゃんになりたくないんだよね。模擬戦とかも魔力を使ってやるとかだから全戦全敗なんだよね。あ、でも面白いこともあったっけ。確かあれは…

3年前：

俺が陸士105部隊に入ってから約1年たったある日。俺は、普通にトレーニング場で魔力トレーニングをしてた時

「おい！新人」

「なんですか？先輩方」

そう言って振り返ると、いきなりぶっ飛ばされた。

「痛っ」

先1「ここは、お前のような素人が使っているような場所じゃねえんだよ」

先2「そうだ、そうだ」

先3「はやくどけよ。このど素人」

くくく、むかつくな。

「先輩方、俺をどかしたかったら力づくでどかしてみてくださいよ。勉強にもなりますしね」

「こいつ、なめた口たたきやがって」

1人の先輩がそういうと魔力弾を撃ってきた。しかし

「どこに行った!？」

「どこに撃ってるんですか先輩方」

「いつの間にも後ろに行きやがった!？」

と言って次々と撃ってくるがすべて俺の体にすり抜けていく。

「そろそろ飽きたからもういいか」

俺はそう言ってソニックムーブで相手の前まで行って1人目を右ストリート、2人目を左アッパー、3人目が逃げ出そうとしているが

「逃がすかよ!ジェットアッパー!!!」

低音部から高音部へ一気にかけのぼるアップカットを放ってK・Oさせる。余談だが、その3人は次の日の訓練は出ずに2日も間寝込んでたという。

「今思い出しても笑えてくるな」

後は、三提督直々の部隊に入って管理局の闇ともいえる部分を駆逐したりしてる。そして今、俺は地上本部にいる。理由としては

竜「えつ、異動ですか？」

ミゼット「そうです。あなたには古代遺物管理部機動六課に行ってもらいます」

「ねえミゼット婆さん、本気で言ってるの？」

「本気ですよ」

「なんであんな高ランク魔導師ばかりがそろってそのうえエースオブエースがいるような場所に行かなきゃならんのだ」

「あなたが適任だからよ」

くそ、このままじゃ埒が明かん。

「ふう、分かりました。行きますよ。で、いつ異動ですか？」

「明日よ」

「…なに—————!!」

その声はかなりの範囲で響いたとか

次の日：機動六課前

「ここが、機動六課か。リーヴ部隊長室までの道案内頼んだぜ」

『なんだか久しぶりに出た気がします』

「ん、何言ってるんだ？」

『いえ、なんでもありません。こちらです』

10分後…

ここだな部隊長室は。よし、ここは一発

竜「邪魔するで〜」

は「邪魔するなら帰ってやあ〜」

「ほなまたな〜っておい！帰すな！」

と振り向いた瞬間

この時竜児に電撃が走る…

ざわ…ざわ…

(た、たぬき?)



「ん？」

「は～や～て～ちや～ん」

はい！魔王が現れました（笑）

「「ぴよー！許してください」

「だ～め」

「「ハハハ、＼（＾o＾）／」

「デイベイーンバスター！！」

「「ギヤーーーーー」

知ってるか魔王からは逃げられないんだぜ（キリ

### 第三話（後書き）

フエイト「作者さくん」

作者「はい！なんでしょう」

「なんで私だけ本編に出てないのかな？」

「ええーと長くなったから」

「次こそは出番あるよね？」

「（ガクガク）はい、もちろんです！！」

「そう。ならいいんだよ」

ふう。めっちゃ怖かった

竜「まあ出てなきゃああなるな」

「お、竜見じゃん何の用だよ」

「アンケート」

「うぐっ！？今その言葉はやめて。かなり精神にくるから」

「まっ、こんな素人で小説初挑戦の作者にアンケートの回答や感想など来るわけないか」

「そんなこと言うなよ」

作者がログアウトしました。

「あ、行っちゃまった。ええ、皆様の感想やアンケートの回答などを待っています。」

送ってくれたら作者が飛んで喜びます。ではまた次回会いましょう」

## 第四話（前書き）

3人娘の性格はこれでよかったのだろうか？そして他の作者さんたちにはだいたい1話

を何文字で書いているのだろうか？誰か教えてください。 （作者はだいたい1200〜1400の間ぐらいです）

ともかく第四話始まります

## 第四話

機動六課部隊長室

俺たちは今………

な「もうなんで自己紹介の時なのにそんなにふざけているの（怒）」

絶賛土下座されて説教されてます。てか、足痛い。

「はやてちゃんもはやてちゃんだよ。何であそこで悪乗りしちゃうの仮にも部隊長なんだからしつかりしなくちゃダメじゃない」

は「だってまさかああ来るとは思わなかったから。つい」

「つい、じゃないよ。もう」

「???」「まあまあ、なのはちゃんもうそこらへんでいいんじゃない

「？」

「???」2「そーうですよ」

そこに金髪の人となんかメルヘンチックな妖精がその人をなだめていた。

「まあ冗談はここらへんにしといて、君が今日から機動六課に異動してきた子やろ?」

「あ、はい。本日から異動となりました。真田竜児三等陸士であります」

「私はこの部隊の部隊長の八神はやてやよろしく」

「私はフェイト・T・ハラオウン。ここではライトニング分隊の隊長をやってるんだ。よろしくね」

「私は高町なのはだよ。ここではスターズ分隊の隊長をやってるんだよ。よろしくね」

3人が自己紹介を終えると同時にある一つの質問が聞き出される。

「ところで童児君の年はいくつなん？」

「え、21歳ですが何かありますか？」

「何で21歳なのに階級が三等陸士なんや？」

「あれ？資料には何も書いてなかったんですか？」

「残念ながらそうなんよ」

「……ちくしょう！資料書いたやつ誰だよ！まあ言わなきゃならんよな」。

「実は俺、魔力・魔導師ランクがともにDしかないんですよ。」

「え……それ、ほんまなん？」

「はい、本気です。なのでここではお手伝いぐらいしかできません。」

まあ、前の部隊でも荷物扱いだったので慣れましたが

「まあ、分かったわ。でもここではうちらより年上やし別に敬語はいらんで」

「え？でも」

「私もそれでいいよ。ね、フェイトちゃん」

「うん、そうだね。できればそのほうがいいかな」

「分かり……分かった。じゃあ俺はちよつとこのあたりを見てくるよ」

「ほんならリインを連れていくとええよ」

「私はリインフォース？空曹長です！リインと呼んでください」

「こちらこそよろしくリイン。じゃあ案内よろしく」

「はいですー！」

そういつて俺たちは部隊長室を後にした。

はやてside

あの人が出て行って私はなのはちゃん達にさっきのことを聞いた。

「なあ、どう思う？あの人のこと」

「うん、とりあえず上のほうからのスパイってわけじゃなさそうだね」

そうなんや。私らは試験的に設立・運用された部隊とはいえあんまり上のほうは納得いっとらんからなあ。特に地上本部とかからは嫌われとるからスパイとかも送ってきそうやけど。

「あの性格はどう見たってスパイとはいえへんな。ん、なのはちゃんどうかしたんか？もしかして竜児君のことが気になるのかか？」

私はいたずらめいた顔で聞いてみる。

「そうなの、なのは」

「ふえ！？ち、違っよはやてちゃん！ただ」

「ただ、なんや？」

「うん。あの人と一回あったことがあるような気がするんだけどど

「こであったのかなあって思って」

「ふーん。ま、ええか。とりあえずこの1年間は大事にいくで！」

「そうや。やっとなかんだチャンスなんやなにがなんでもものにする  
で！」

## 第四話（後書き）

作「やったー！ー！！」

竜「うお！いきなりどうしたんだよ」

「ようやく感想が来たんだよ」

「よかったな。ええ、日緋色金さん感想・ご指摘ありがとうございます」

ますってあれもう1通来てなかったか？

「・・・そんなものなかった」

「嘘付！！あつただろうが！」

「そうか？」

「いっぺん死んでこーい！」

「うわ、そのブローはダメ！」

「だまれ、ギャラクティカマグナム！！」

BAKOON

「ギャー！ー！ー」（完）

ええ、本当はもう1通来ていましたがこのサイトの規則に反していたので削除させていただきました。すいません。

それとアンケートは・・・来るわけですね。分かっていたました。

これからも続くので感想や質問などを待っています。もし、もしアンケートに答えたいたのであればそれも送ってもらってよいです。詳しくは、第2話のあとがきをご覧ください。

それではまた次回

## 第五話（前書き）

なかなか長めにかけません。

文才が・ほしいです（泣き）

## 第五話

竜児 side

俺は、部隊長室を出てリインに六課の道案内をされているときに疑問に思っていることを質問した。

竜「なあ、リイン」

リ「なんですか？」

なぜか俺の頭に乗っているリインは答える。

「リインの名前を聞いた時にふと思ったんだけどよ、リインフォー스？ってことは初代、つまるところの？  
ってのもいるんだろ？」

「え！？ええつと実はですね、私はリインフォースの名を受け継いで作られた融合型デバイスなので会ったことがないんですよ」

「じゃあ？のほうはもう・・・悪い、聞いちゃいけないことを聞いちゃったみてえだな」

「いえ！そんなことはないですよ！！それに姉さまの話はマイスターはやてやシグナム達から聞かれていますし、私自身は姉さまのことを尊敬していますし、マイスター達も好きだったんですよ！」  
「そうなのか。それはそいつにとっては最高の時間を過ごせたんだな・・・ちよつと羨ましいぜ」

「何か言いましたか？」

「いや、なんでもない。さあこんな話はしまいにして道案内の続きを頼むぜ」

「は、はいです」

俺はおくれるだろうか？そんな人のように後悔しない人生を。そんな話をしながら歩いていると前のほうから4人の少年少女が歩いてきた。そしてそのうちの1人が、

????「あ、お疲れ様ですリイン曹長」

とあいさつし、それに気づいた残りの3人も

????「「お疲れ様です!」「」

とあいさつをしてきた。するとリインが俺の頭から離れて

「お疲れ様です皆さん。訓練は終わったのですか?」

「はい!これから昼食に行こうと思ったのですがってあの「こちらの方は?」

おっと聞いてきたか。自己紹介はしなくちゃな。

「俺は、真田竜児。別に敬語とかいらねえから気軽に呼んでくれ」

俺がそういって自己紹介をすると、

「りゅ・・・竜児さんですか?」

「ん、そうだが?」

なんだか青髪の子がそう聞いてきて

「竜児さん。ようやく会えました」

うお！？な、なんだ。俺この子に会ったことあったけ？

「忘れましたか？私です。スバル・ナカジマですよ！」

ん、スバル・ナカジマ？はて、どこかで聞いたようになってあー

「思い出した！！お前4年前の時の火事で泣いてた奴か！」

「ちょ！泣いてたっていうのは言い過ぎですよ！」

「でも本当のことだから仕方ねえじゃないかよ！」

ん、本当のこと？

「なあ、スバル。おまえ俺があの時やったグローブまだ持ってたりするの？」

「え、あのグローブですか？持ってますよ。なんたって私たちが出会った証のものですから！」

『出会った証』か。ということはあれはスバルにとっては現実で俺にとつては夢？だったのか。いや、そうじゃない実際に俺も体験してるんだ。あれは夢というリアル感じじゃなかった。じゃああれはいつたいなんだっただ？ますます分からん。

「ちよつとスバル。あんただけ勝手に盛り上がってるんじゃないわよ」

「ん、あー！ごめんティア」

ま、いいか。それよりも

「ところでスバル。この人たちは誰なんだ？」

「あ、ええとね「いいわ、自分で言うから」え」

なんかこの2人仲いいな。

「私は、ティアナ・ランスター二等陸士です」

「僕は、エリオ・モンディアル三等陸士であります」

「私は、キャロル・ルシエ三等陸士であります」

「キユクー」

「あ、この子はフリードです」

みんな元気だなあ。まあ例外もいたけど。しかしなあ

「ええと、エリオとキャロだっただけか？」

「「はい、なんでしょうか」」

「あんな、別にそんな畏まらなくてもいいぞ。年上といっても階級はお前ら2人と一緒の三等陸士なんだからな」

「え、そうなのですか真田さん」

「そうだよ。だからその真田さんって呼び方はやめてくれ。むず痒いから」

「分かりました。なら竜児さんと呼ばせてもらいます」

竜児さんねえ、まあ初対面だしそこまで言う必要もないか。

「それよりも竜児さん」

俺がそう考えてるティアナが質問してきた。

「階級が二等陸士というのは本当ですか？」

おっとまたその質問か。答えてもいいんだよね？・・・

(大丈夫だ、問題ない)

ん、今なんか声が聞こえてのは気のせいか？

「どうしたんですか？」

「ん、ああ、なんでもない。えっとなんで三等陸士なのかはな、俺の魔力・魔導師ランクがDしかないからだよ」

と俺が答えると

「.....」

しばらくの沈黙の後って耳塞いどい。

「.....え.....!!!!!!」

はい、叫び声ご苦労様。ていうかリイン、お前さっきも聞いたろ。何でお前まで驚いてんだよ。

「それほんとなの竜児さん!!」

「ああ、まじだよ。だからここではせいぜい雑務とかそついう裏方で働くことになるかもな」

まあ、ブローとか解禁できれば話は別もんだがな。

「とりあえず1年間よろしく」

「.....よろしくお願います」

気長に行きますか！



## 第五話（後書き）

作「またきたぜー」

な「何叫んでるの？」

竜「どうせたあいのねえことだろ」

「何をおっしゃる。また感想が来たんだぞ!!」

「な、なんだってー」

「ふふふ、これでようやく俺の時代が」

「くるかー！ー！ー！」

「へぶっ」

ええ、天神雷輝さん感想とアンケートをありがとうございます。これからも読んでいただけるとありがたいです。

これからも感想・指摘・質問・アンケートの回答等送ってきてくれるとありがたいです。ではまた次回

## 第六話（前書き）

作「私は聖帝だー！ー！」

竜「だからちげえだろ！」

フェ「ふう、リリカルなのはStrikers 己の拳にける道  
始まります」

## 第六話

入隊から1週間後

ども！！毎度おなじみ竜ちゃんです。

竜「って作者！何ふざけたこと書きやがる！！」

(いや、なんとなくwww)

「てめえ、なにがwwwだ！」

シ「おい、なにをしている」

げっ！？シグナムさん。

「なんだその鳩が豆鉄砲食ったような顔は」

「いえ、いえなんでもありません！！」

(くくっ、怒られてやんのwww)

あの野郎後で覚えてやがれ(怒)まあ、今はこの状況をどうにかしなきゃな。この1週間の間でほとんど六課での自己紹介は終わっていてシグナムさんやヴィータ達、はやての守護騎士たちへのあいさつもすんでいる。だが俺は、困っていることもある。それが

「ところで真田、私と「断ります！！」まだ何も言っていないが」「どうせ模擬戦の話ですよ。なんで魔力・ランクともにDの俺としようというんですか？シグナムさんと俺とじゃ全然勝負になりませんよ」

そうなのだ、なぜかシグナムさんはことあるごとに俺に模擬戦を申

し込んでくるのだ。理由はわからないが。

「むう、そうか。しかし真田」

「なんですか？」

「おまえ、何か私たちに隠してることがあるのではないか？」

「ギク！？もうばれたのか？」

「なんのことですか。俺には見当が付きません」

「見当がないか。私は魔力や魔導師ランクだけではなくお前のその隠れた闘気のほうに気になるから模擬戦を申し込んでいるのだがな」

え、そんなに隠せてないか？やはり話すべきかな。いやまだ大丈夫だろう。

「まあ、気づいているものは少ないと思うが」

ほらな。だから、

「すみません。今はまだ話せません」

「そうか、それではいつか話してもらおうぞ。そしてその時に勝負だ  
！」

そういつてシグナムさんは去って行った。それにしてもまだあきらめてなかったんかい。ああいう人を何て言ったかな？バトルマニア そうだ戦闘狂だったけか。と、そう考えて

「はあ〜」

とため息をして止まっていた清掃を再開した。

清掃を続けて今はへりの清掃中である。でもこれはへりと呼んでいいのか？

ヴァ「お！頑張ってるな竜児」

俺が考えている最中にさっそうと登場するヴァイスさん。

「あ、ヴァイスさんお疲れ様です」

「おいおい、あんま歳離れてねえんだからもっと気楽に話してもいいんだぜ」

「しかし「いいからいいから」んーじゃあ次からさっします」

「おう。そうしてくれ」

そんなふうにしてやべっていると、

ヴィー！！ヴィー！！ヴィー！！ヴィー！！ヴィー！！

と何やら警告音が聞こえてきた。

「ヴァイス、このアラートは！」

「間違いなく一級警戒態勢っスね」

事件ってことはフォワードの初出勤か？と俺が考えている間にフォワードとなのはさんがやってくる。

ス「竜児さん！」

「おお、スバル。今から初出勤なんだな。頑張ってこいよ」

俺がそう言つと

な「なにいつてるの？竜児君もくるんだよ」

「へ？」

今なんとおっしやいましたか？なのはさん。

「だから竜児君も一緒に連れて行ってはやて部隊長が」

あんのくそ狸がーーーーー！

ティ「え、竜児さんもですか？」

お、ティアナ反論してやれ。

「そつだよティアナ。竜児君にも魔力があるしいい勉強にもなるしね」

「わ、分かりました」

NO、ティアナ撃沈！ちくしょう俺には逝くことしか権利がないのか？

「うん。そつだよ」

なのはさん、そんなに笑顔全開で言わないで下さいよ。俺、生きて帰ってこれるかな？



## 第六話（後書き）

竜「さあて、作者 n u k o s a n ! 覚悟はできてるんだよなあ（怒）

「作「すいません。ほんの出来心だったんです。許してください」

「許すと思うか？」

「さあ？」

「答えはN o じゃあー！ー！ー！」

ドカ！バキ！ドシャア！

ちーん

フェ「ええ、作者さんがあんな状態なので代わりに私がいいます。サウザーさん感想・ご指摘の方ありがとうございます。まだまだアンケートの方も続いていますのでそちらの方もよろしく願います。では、また次回」

「俺は・・・まだ、しな・・・ん」

## 第七話（前書き）

今回は、長いうえにグダッテます。  
ではどしどし

## 第七話

バババババ……

空を自由に飛びたいな〜……

「じゃねえ!!」

ああ、結局乗る羽目になっちまったじゃねえかよ〜。

「どうすりゃいいんだ、ヴァイスさんよー!」

「いやそんな泣きつかれてもどうすることもできねえよ」

そんな殺生なこと言わんといて〜な〜。

「新デバイスぶっつけ本番になっちゃたけど、練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「頑張ります」

そうこう言ってる内になのはさんが激をいれていた。そして

「エリオとキャロ、それにフリードも。しっかりですよ!」

「はい!」

「はい!」

「キュー」

ラインもそれに便乗して言う。

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おっかなびつくりじゃなくて、思いっきりやってみよう」  
「「「「はい！」「」「」

おお、フォワードの奴ら元気あるなあ。こりゃ、緊張もしてないしいいことだな。ってあれキャラ？

「キャラ〜口〜」

「は、はい！」

おいおい緊張しまくってるじゃねえか。エリオは大丈夫・・・じゃねえな。

「エリオ、キャラ」

「「「なんでしょうか？」」

「初出勤だから緊張してんのか？」

「はい」

う〜んこんな時は

「おまえらはここまで高町教導官に鍛えてもらってきたんだ。それをすべて出せれば任務は必ず成功するさ」  
「で、でも」

ん、キャラが何か言いたそうだな。

「竜召喚は危険な力なんです。私が制御できなかつたら」だからどうした」・・・え！？」

「制御できねえのはキャラの力が足りないせいじゃねえ。お前がその力を信じ切れてねえから制御できねえんだ。だからな、キャラは

自分の力とフリードや仲間を信じればいいんだよ」

俺はキャラコの頭をなでながらそう言った。そして、とどめとばかりに

「それにピンチになったら助けってくれる王子様がすぐ近くにいるしな。な、エリオ」

こう言った。そしたらエリオが

「え！？僕ですか！」

「なんだ違うのか？」

「からかわないでくださいよ」

ハハ、これで少しは緊張もほぐれたかな。

## キャラコside

私が村から出てこの管理局に拾われた時も私は竜たちの制御がうまくいかなくて怯えたまま生活をしていた。フェイトさんに保護されてもそれは同じことだった。でもフェイトさんやほかの人たちと過ごすこと

で私も笑えるようになったし機動六課に入ったのもフェイトさんの力になりたかった。でも私は竜召喚の力を使うのが恐ろしかった。制御できなかつたらエリオ君やティアナさん、スバルさんを傷つけ

てしまう。だから恐ろしかった。でも、

「だからどうした」

竜児さんのこの一言が私に勇気をくれた。更に

「制御できねえのはキャラの力が足りないせいじゃねえ。お前がその力を信じ切れてねえから制御できねえんだ。だからな、キャラは自分の力とフリードや仲間を信じればいいんだよ」

私の頭をなでながらそう言ってくれた。でも

( 竜児さんの手、温かい。まるでお兄ちゃんみたい )

「それにピンチになったら助けってくれる王子様がすぐ近くにいるしな。な、エリオ」

ふえ！？何でそこでエリオ君の名前が出てくるの？でもほんとにそうだったらいいなあ

《キャラは若干乙女心を覚えたようです》

それぞれの緊張が取れてきたところで

「なのはさん！！降下ポイントに着きましたよ！」

「了解！！ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を抑える」

「うす、なのはさん。お願いします」

「じゃ、ちよつと出てくるけど、みんなも頑張つてズバツとやっつけちゃおう」

「……はい！」「……」

うん、いい返事だ。みんな緊張が取れてるな。そしてなのはさんが飛び降りてバリアジャケットを身に纏い、ガジェットのもとへと飛んで行った。それを確認したリインが、

「任務は2つ。ガジェットを逃走させずに全滅すること。そしてレリックを安全に確保すること」

そして空間モニターを映し出して

「ですから、スターズ分隊とライトニング分隊2人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央へ向かうです」

更に空間モニターを映し出し

「レリックはここ7両目の重要貨物室。スターズかライトニング先に到達した方がレリックを確保するですよ」

「……はい！」「……」

リインの説明が終わった後すぐに1回転をして服装を変え

「私も現場に降りて、管制を担当するです」

と言ったそちらも準備はO・Kということか。そしてヴァイスが

『さあて新人ども。隊長さんたちが空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備は良いか!?』

そう言った。新人たちの降下時間だ。

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「行きます!!!」

まずは、スターズの降下、それが確認されると

『次、ライトニング!チビ共、気をつけてな!』

「はい!」

2人が返事したのはいいけどまだキャラが少し緊張してるな。しかしエリオが

「一緒に降りようか?」

そう言ってキャラに手を差し伸べる。お、何だかんだ言って結局支えてるじゃん、エリオの奴。

「え?.....うん!」

キャラも一瞬戸惑ったがその手をつかむ。そして

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュル！」

「行きます！！！」

そのまま飛び降りていった。

そして任務中……

俺がみんなの活躍を見ているとヴァイスが話しかけてきた。

「しかし竜児、お前結構面倒見があるんだな。チビ共の緊張も一瞬で説いちまうんだから。お前もそんな経験があったのか？」

「いや、まあ俺が次元漂流者だったのはお前も聞いてるだろ？」

「ん？まあ聞いてちゃいたけどよ」

「俺、この世界にくる前はボクシングっていう格闘技をやってたんだよ」

「格闘技ってスバルがやってるようなもんか？」

「まあそれに似てる」

ほんとは結構違うけど。

「それで俺も初試合の時があったんだよ」

「へえ、じゃああんたもそんな時は緊張したんだろ」

ヴァイスは少し笑いながら聞いてきたが

「いや、まったく緊張しなかった。むしろ楽しみだった」

そういうとヴァイスの笑みが少しばかりなくなり理由を聞こうとする。だが

「おい、それどういう意味「ヴァイス！ガジェットが来てるぞ」ってうお！」

それをヴァイスは見事に回避する。すげえ操作技術。ともかく

「まあ話はまた今度しゃべりますよ。それよりも今は任務に集中しましょう。またガジェットが来たらたまりませんよ」

「ん、おう」

そう言っただけで任務を見ることに集中する。それにしても

「なあ、ヴァイス」

「今度は何すか？」

「隊長たちすごいっすね」

「まあ、なんといいだてうちの隊のエースだからな」

「ふん。あ、エリオが落ちた」

「へえ」

「…………え？ええ……………」

「落ちたああああっ……………」

「おいヴァイス！もっとへりを近づける……………」

「無理っすよ……………」

まじかよってああ……………キャロまで飛び降りやがった……………あいつどうする気だ……………ん？キャロの周りが光ったぞ……………おお！竜が出

てきた！！あれが竜召喚か。キャロの奴やればできるじゃねえか。

キャロの覚醒もありフォワードメンバーの初出勤は完了した。空の方もなのはさんたちが片づけてくれたみたいだしこれで終わりかな・  
・。つてえー！ガジェットが一機なのはさんたちに接近してるんですけど！？しかも本人は気づいてねえし！

「ヴァイス！へりを横に向けろ！」

「な！？急にどうしたンスか！？」

「良いから！！早く！！！」

「了解！！！」

よし

「サイドハッチ開けてくれ」

「ウス！！！」

ガチャン……プシ……

「リーヴ！！風圧は大丈夫だよな！」

『問題ありません、マスター』

気づいてくれよ！なのはさんたち

シュツ、シュツ

「フッ！」

シュン

「お疲れ、フェイトちゃん」

「お疲れ様、なのは」

「フォワードメンバーも、終わったみたいだね」

「なのは！後ろー！」

「え？」

（ガジェット！？まだ残っていたの！まずい！）

キン・・・・・・・・シユツ

「ハア！」

ドオン・・・・・・・・

「なのは、大丈夫？」

「ありがとうフェイトちゃん」

（ふえ？ふええええええつ？終わったと思ってたのに、一機残ってたの！？フェイトちゃんが倒してくれたからよかったけど）

「なのは、バリアジャケット少し破けてるよ」

「え？」

（いつの間にかこうなっていたの？確かガジェットが来た時も一瞬ぐらついたような・・・・・・・・あ！へりに誰か・・・・・・・・竜児君！？ウソ！？でも……あれえ！？）

「ふう、何とかなったな」

「竜児、今のは」

「ヴァイス、今のは秘密な」

「いや……………それは無理だな」

「なんでさ?」

「……………リアルタイムで映像流れてますから」

「……………なんでさあああああああつ!!」

俺は、某正義の味方ふうに言った。ハアどうやってごまかそうか。そう思って俺はみんなの帰りを待った。



## 第七話（後書き）

な「サウザーさん。感想・ご指摘・アンケートの回答ありがとうございます」

作「それにしても隊長たちはすごいね。さすがエース」

フェ「そんなことないよ。ね、なのは」

「うん、そうだよフェイトちゃん」

竜「いやいや、あそこまでするともう貫禄つてのがあるぜ」

「そうかな、あ、そうだ竜児君の過去ってどうなってるの？私気になるんだけど」

「ああ、それはな、「ストーップ!!」なんだよ」

「それはまた書くから、今はまだ秘密だ。ネタバレするなよ」

「分かったよ」

アンケートはまだまだ続けます。ヒロインの要望があれば書いてください。なるべく考えます。でもエリキャラは確定してるのであしからず。それとユーノをなのはとくつつけるかどうか書いてくださるとうれしいです。

ではまた次回

## 第八話（前書き）

文才え・・・めちやくちや欲しいです。

感想・ご指摘・アンケートをお願いします

## 第八話

任務完了時へり・・・

あの後、スターズの3人とリインがへりに乗り込み、そのまま中央のラボまでレリックを護送してもらった。その途中で、

「ねえ、竜児君」

なのはさんが何やら話かけてきた。あの話じゃなきゃいいけど

「なんですか、なのはさん？」

「さっきのことなんだけど」

はい来たよこの質問！

「さっきとはいつのことですか？」

よし、冷静さを保て俺。

「私にガジェットが向かってきたときだよ」

「え！？そんなことがあったんですか？なのはさん」

「まあ、不意打ちだったけどね。そのときフェイトちゃんが気付いてくれなかったら私落とされてたよ」

ナイス！スバル。これで話がそれればいいが。

「そうじゃないよ！私が後ろを向いたときはガジェットが一瞬グラ

ついてて、しかもバリアジャケットが少し破けてたんだよ」

「それと俺の関係性はどこにあるんですか？なあ、ティアナ」

「え！そこで振りますか。そうですね、竜児さんは何もしてないんじゃないんですか？」

ナイス正論ティアナ。

「そうなのかな？」

「そうですね。俺、何もできないですからね」

・・・自分で言っただけ悲しくなってきた。

「そうだね、じゃあ帰ろうか」

なのはさんはそれで納得したようだ。もう何も無ければいいが。

『竜児iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!』

あ、まだ残ってたよ・・・orz

「なんですか？」

『帰ってきたら即部隊長室に來いや!!!!!!!!!!部隊長命令や!!!!!!』

「わかりました」

ハア、めんど。

六課に戻ってきてきたのはさんと先ほど合流したフェイトさんととも

に部隊長室前にいる。さて、

コンコンコン

「ごめんください、どなたですか。真田竜児です。お入りなさい。  
ありがとうございますww」

ドゴ……

この言葉に見事反応したのは……はやてさんだけだった。

「ふう、はやてさん以外分かってないなあ」

「ふふふ。お宅も結構やるやないか」

「そりゃどうも」

「マ、マイスター？」

「リインやなのはちゃん達はわかってないな」

「そうですね」

「あの、はやて？いったい何の用なの??」

フェイトさんが本題を聞いてきた。

「あ、こんなことしてる場合やなかったわ。竜児君に聞きたいこと  
があるんやった」

と、はやてさんが言って映し出した映像は俺がシャドーをしている  
映像だった。

「お、俺のシャドーを取っておいてくれたんですか。ありがとうございます  
ぞいます」

「せや、この映像は高くつくでえ。じゃなくて、問題は次の映像

「や！」

次に映し出されたのは・・・ガジェットがグラついた映像だった。それに反応したのは

「っ！はやてちゃん！これは！」

なのはさんだった。

「せや、竜児君がああの動きをして右拳を出した直後にああなったんや。さあどういうことがキリキリ説明してもらおおか」

げえ、リアルタイムだったとはいえそこまで撮るか？普通。だがしかし、俺には言い訳ができる。

「あの時は暇だったんでシャドーの確認をしてたんですよ」

「何でヘリの中でしたんや」

「いや、不安定な場所だったし周りにだれもいなかったですしね」

O・K、O・K。ここまでは完ぺきな対応策だ。

「まあええ。せやけど、あのガジェットのことはどう説明するんや？」

「風のせいじゃないですか？だいたい魔力Dの俺があんな遠距離攻撃なんてできませんし」

「そ、それはそうやな」

「もういいですか？」

「あ、ああ、もうええわ」

「では、失礼します」

そう言っつて俺は出て行つた。ふう、これでよかつたかな。

なのはside

うん、竜児君はああ言つてたけどなんか納得がいかないの

「ふっふふ」

は、はやてちゃん？

「大丈夫、はやてちゃん？」

「なのはちゃん。私考えたんやけど、もしあの風が竜児君の手によつてだされたもんやつたら・・・使える、使えるでー！！！」

ふえ！

「フェイトちゃん、どういうことなの!？」

「なのは、落ち着いてよ。たぶんだけどはやては、竜児君が何らかの力であの風を起こしたとしたら竜児君もフォワードの訓練に参加させるつもりじゃないかな？」

へ?あれを竜児君が・・・でもあの時・・・いや、ごまかして

るかもしれない。でも確かめる方法が

「あるで、確かめる方法なら。フェイトちゃん。すぐにシグナムを呼んできてや」

え！？シグナムを

「はやてちゃん。まさか」

「クツクク……そのまさかや」

ハア、大丈夫かな竜児君。

竜児 side

ゾクっ！！

な、なんだ！？今すげえいやな悪寒が流れたんだが

「あの、大丈夫ですか？竜児さん」

「ああ、エリオか。いや、なんでもねえ」

そっだ何でもないんだ。

「そうですか？それならいいんですが」

「それよか、初出勤お疲れさん。なかなかかつこ良かったぜ」

「そ、そうですか」

俺にそう言われて照れるエリオ。

「これから風呂か？」

「はい、そうですよ」

「あ、じゃあちよつと待っててくれ。俺もすぐに準備するから。一緒に入ろうぜ」

「ええ！？でも」

「気にすんなって。じゃ、ちよつと待っててくれ」

そう言っつて俺は風呂の準備をするために部屋にも戻る。まあ、エリオと一緒に部屋なのだが。

準備を済ませた俺は、すぐにエリオと合流してバスルームへと向かった。

バスルーム・・・

バスルームに到着して俺とエリオは服を脱いでいた。そのときエリオは俺の右肩部分の傷を見て

「竜児さん。その肩の傷はどうしたんですか？」

「ああ、これか？これは俺が4年前、この世界の魔法を始めて見てそして、それを受けた時の傷だ」

「っ！そういえば竜児さんは次元漂流者でしたね」

「ん、フェイトさんにも聞いたのか？」

「はい、確かその日、銀行で強盗があつてそれを止めた次元漂流者がいるって、てっ！その時の漂流者ってまさか！？」

「おお、それたぶん俺だわ」

おいおい、これって秘密じゃなかったのか婆ちゃん。

「くしゅん！ん？」

「まあ、この話を知っているのはごく一部の人だけですから大丈夫ですよ」

「そうなのか？良かった」

「それで、あの」

ん、何か言いたそうだな。

「どうした？」

「あの竜児さんは帰らなくても大丈夫なんですか？ほら家族とか心配してそうですし」

その質問か。

「いや、寂しがる家族はもういねえな。てかなんでいきなりそんなこと聞くんだ？」

「え？ええ……と」

「どうした？なんかあるなら話してみ」

「は、はい。聞いてください」

「まっ、その前に上がるうぜ。続きは部屋に帰ってからだ」

「あ……………分かりました」

その後俺たちは、一言もしゃべることなく部屋に着いた。そして、  
そこで聞いた。

エリオの……………過去を。

## 第八話（後書き）

作「……………」

竜「どうしたよ？」

「お邪魔しますか？」

がくっ

「何でいきなりそうなるんだよ！しかも「か？」はいらねえだろ」

「はあ、そうですか。じゃあ、あなたは元気です」

「いや、そこは「か？」を入れにやならんでしょ!!」

「これでおわりですか？」

「知るか!!」

リ「ハァ」。ではまた次回です！」

## 第九話（前書き）

今回は初出勤が終わったその夜の事です。

エリオの過去の判明ですが、短いです。

ではごうそ

## 第九話

エリオが話してくれた過去は悲観的だった。

エリオが話してくれた過去、それは……

自分が「プロジェクトF」の技術で生み出されたクローンであること。実の親だと信じていた人に裏切られ、捨てられたこと。その後も研究施設での非人道的な扱いを受け、一時期重度の人間不信に陥っていたことを……

「だから、今ここにいる僕は偽物なんです」

「うーん。俺はそうは思えねえがな」

「なぜですか！僕は紛れもないクローン。本物はもういないんですよ……」

エリオが声を大きくして言う。しかし

「モンディアル……」

竜児が一喝してエリオを黙らせる。そして

「お前の名前を言ってみろ……」

「え？エ、エリオ・モンディアル……です」

「声が小さい！もっと腹から声を出してみろ！」

「エ、エリオ・モンディアルです……」

「そうだな。お前の名前は、エリオ・モンディアルだな」

と、エリオの頭に手を置いてなでながら言う。続けて

「この世にはお前しかエリオ・モンディアルという名前を持って  
いる奴はいねえからな。紛れもなくお前は本物だよ」

「でも僕は人口魔導師で「人間じゃないってか？」・・・はい」

「それは違うな。俺が考えるに人間じゃねえのは「心」つまり感  
情を持ってないやつのことを言うんじゃないかねえかって考えてる」

「感情、ですか？」

エリオの言葉に竜児は同意する。

「そう、感情だ。エリオ、お前は怒ったり・笑ったり・泣いたり  
できるじゃねえか。そんな奴が人間じゃないなんて言うなよ。お前は  
人間であり、俺たちの仲間だろ」

頭をなで続けてこういうと

「うっう、うわああああん」

エリオは泣いてしまった。竜児はそんなエリオそつと抱きしめ、し  
ばらくそのままだった。扉の外でその話を誰かが聞いていたことも  
知らずに。

エリオが泣き終わって俺から離れるとうつむきながらもこう言った

「あの、兄さんって呼んでもいいですか？」

「へ？」

突然のことに俺はびっくりしてしまった。

「あの、だめですか？」

「いや、だめってわけじゃねえんだけど。そんなふうに使われたことがなかったもんでな。ちょっとびっくりしちまった」

「じゃあ、呼んでもいいんですね！」

「ああ、いいぜ。そのかわりっていやあなんだが」

俺は、思ってきたことを言う。

「エリオとキャラは・・・確かフェイトさんが保護してくれたんだよね？」

「ええ、そうですが。それがどうかしましたか？」

「となるとだ、2人にとってフェイトさんはお母さんなんだろう？」

「え！？ま、まあそうですね・・・」

そこで、俺が考えたことを言う。

「何でフェイトさんのことをお母さんって言わないんだ？言ってやればフェイトさんも喜ぶだろう？」

「いえ、でもですね」

うーん、やっぱり恥ずかしいのかな？

「言えないならさ、お姉ちゃんからでもいいんじゃないか？家族なんだし」

「お姉ちゃん、ですか？」

「そうだ。そこから慣れていけばいいじゃねえか。家族のふれあいをもっと大事にした方がいいぜ。特にエリオやキャロみたいなん年齢はさ」

「分かりました。言えるように頑張ります！竜児さん！！」

「おう！頑張れよ。じゃあ寝るか」

「はい！！」

そう言って俺たちは就寝した。

## 第九話（後書き）

フエ「ふふふ、ハア、ハア」

竜「……なあ、作者よ」

作「なんだ、竜児」

「何でフエイトさんはあんな状態になってるんだ？」

「さ、さあ？なんで「作者さん！！」な、なんですかフエイトさん？」

「ほんとにエリオとキャラ口はああ呼んでくれるんだよね！！！」

「まあ、本人しだいじゃないですか？」

「ほんと！ほんとなんだね。そしてそのままなのはと……」

「何でそこでなのはさんが出てくるんですか？」

「あ、だめだよ……そんなとこ触っちゃ……」

「だめだこりゃ。聞いてねえ」

「ああ、なのは「フエイトちゃん」

「少し、頭、冷やそうか？」

「え、でもまだそんなこと。いや私は嫌じゃないんだけどね」（ずるずるずる）

テ「……ええっと……みなさんの感想やアンケートなど待っています。

ではまた次回」

## 第十話（前書き）

今回、シグナムさんと対決します。

竜「……………なんでこうなった！」

## 第十話

翌朝・・・

俺は、エリオより早く起きて、今は六課周りの道路でロードワークをしていた。ちなみに時刻は05:00ちょうどである。

「ワン！ツー！」

ロードの随所随所にパンチを織り交ぜフォームの確認もしている。これはこの世界に来て4年間ずっと続けてきたことだ。それともう一つ続けて来てることもある。それは、手と足につけているリストとアングルだ。これには片方1？ずつおもりを入れている。無論4年間ずっとだ。（さすがに任務の時には外してたが）まあ説明はこれぐらいにしてって

「誰に説明してるんだ？」

無論、読者にです by 作者

まあいいか。とりあえずあれから1時間のロードワークが終わり今は休憩をしている。

「精が出てるな。真田よ」

そこにやってきたのが

「あ、シグナムさん」

シグナムさんだった。

「シグナムさんもトレーニングですか？」

「ああ、己を鍛えることは大切だからな」

確かにそれは大切なことだ。それにしてもシグナムさんやけに嬉しそうだな。何かあったのかな？

「シグナムさん。何かいいことでもあったんですか？」

「ふ、そういうふうに見えるか？」

「はい、とても」

「そうか。それもそうだな。今日は楽しみにしてるぞ」

楽しみ？何をだ

「あの、シグナ・・・」

俺がそのことを聞こうとしたらシグナムさんは行っていてしまった。ほんと、なんだろうな？そう思い俺はシャドーを始めた。

午前のフォワードの訓練中俺は特に仕事がなかったので、ヴァイスとシグナムさんの2人とフォワードの訓練を見ることにした。しばらく見てるとヴァイスが、

「いやー、やってますなあ」

と言いきそれにシグナムさんも

「初出勤がいい刺激になったようだな」

と答えた。更にヴァイスが

「いいつすね、若い連中は」

と言った。って

「おいおい、お前もまだ若いだろうが」

「そうか？それでもあいつらの訓練についていけねえぞ」

まあ、それは分かる。なんてったってあれは魔導師の訓練だからな。

「どう思いますシグナムさん？」

「若いだけあって成長が速い。まだしばらくの間は危なっかしいがな」

「ふ、そつスねえ」

シグナムさんの言葉にヴァイスが同意する。まあ俺もそつ同意するけど

「シグナム姐さんは参加しないんで？」

「私は古い騎士だからな。スバルやエリオのようにミッド式と混じった近代ベルカ式の使い手とは勝手がちがうし、剣を振るうしか能がない私はバックス型のティアナやキャロに教えられるようなこともないしな」

シグナムさんがヴァイスの質問にたんと答えていく。

「ま、それ以前に私は人にものを教えるという柄ではない。前方な  
ど届く距離まで近づいて斬れ。ぐらいいしか言えん」

「すげえ奥義ではあるんすけど。ま、確かに連中にはまだちいとは  
やいっスね。な、竜児」

「ああ、その理論は1対1の時の理論だからな」

そう話していると、

ピイイー

「はい、じゃあ午前の訓練終了！」

お、終わったみたいだな。さてと

「はいお疲れ。個別スキルに入るとちよっときついでしょ」

「ちよっというか」

「そのかなり」

みんなが話してる時に

「みんなお疲れさん」

俺はスポーツドリンクとタオルを持ってきてそれをフォワードのみ  
んなに渡した。その時エリオが

「あ、竜児兄さん」

と言ってきてそれにフェイトさんが

「え！？何で竜児君がお兄ちゃんって呼ばれてるの！？」

と、なぜかデバイスを構えながら言ってきた。

「とりあえずデバイスをしまってくださいフェイトさん!!」

まあ何とか落ち着かせてこうなった経緯をかいつまんで説明したらフェイトさんは納得してくれたがなぜかみんなから少し離れて体育座りをしだした。そして

「どうせ私なんて、まだ名前にさん付けでしか呼ばれてませんよー  
・・・」

と、いじけだした。たく仕方ねえな。

《おい、エリオ》

《なんですか？兄さん》

俺は念話でエリオを呼び、昨晚言ったことを実行するように言った。

《分かりました。やってみます》

《キャラにも言っとけよ》

《分かりました》

そう念話してエリオがキャラに何か耳打ちしてフェイトさんの前まで行った。

「「あの」

「「どうしたの？エリオ、キャラ」

「「これからもよろしくお願いします。フェイトお姉ちゃん!!」

そう言った。もちろんフェイトさんは

「お、お姉ちゃん？」

戸惑っていた。

「あの、だめですか。お姉ちゃんと呼ぶのは？」

「いや、いいよ！もっと呼んでもいいよ！..！」

エリオがだめか聞いてみたがフェイトさんは即オーケーを出していた。俺が安堵していると今度はキャラロが

「あの、竜児さんのことをお兄ちゃんって呼んだらだめですか？」

「ん、なんでなんだ？」

そう言ってきたので俺は理由を聞く。

「ええつと、初任務の時の竜児さんが頭をなでてくれた手がとても暖かくてまるでお兄ちゃんのようにだったので」

お兄ちゃんのように、か。そんなこと言われたこともねえな。

「まあキャラロの頼みだし、いいぜ好きに呼んでも」

「はい！竜児兄さん！..！」

「あ、じゃあ私も竜兄って呼んでもいい？」

「スバルもかよ！ま、いいぜ」

「ありがとっ、竜兄！」

そんな話をしているとなのはさんが

「そつだ！竜児君午後は空いてるよね？」

「え、まあこっちは基本指示がなければ何もありませんし、行ってしまえば暇ですね」

「それじゃあ、午後の訓練で竜児君には模擬戦をしてもらうからね」

・・・なんだってーーーー！！

「模擬戦って誰と戦うん・・・」

ですか。と聞こうとしたがやめた。俺は理解したからだ。シグナムさんが言っていた言葉を。しかし

「部隊長の許可はあるんですか？」

「その部隊長が言ってたんだよ」

まじかよ！やっぱりあいつはためき以外の何物でもねえ！！

作者 side

あの後竜児は、昼食を食べて今は訓練場にいた。目の前にはもちろんシグナムがいる。

「はあ、シグナムさんほんとにやるんですか？」

「ああ、私も楽しみにしているからな」  
『じゃあ始め!』

なのはの言葉で試合が開始される。だがここでちょっとしたことが起きる

「リーヴ、セットアップ」

【分かりました】

竜児がそういうとリーヴが返事して竜児の格好がリングにかけろの全日本Jr.のユニフォーム姿に代わり手には星矢の手甲がしてある。それになのはが

『ええ! 竜児君ってデバイス持ってたの?』

と言ってきて、竜児もそれに答える。

「ああ、言ってますでしたよね。リーヴ、あいさつしとけ」

【はい。隊長・副隊長方それにフォワード皆さん。初めましてリーヴスラシルと申します。マスターともどもよろしくお願いします】

「自己紹介はこれぐらいにして始めましょうか」

「ああそうだな」

そういうと

「行くぞ! はあー! っ! っ!」

言うや否やシグナムは走ってきて竜児に斬りかかってきた。しかし竜児はそれをすべて交わしていた。

「どうした。攻撃はしないのか！」

シグナムが挑発をするが竜児は答えない。そこにシグナムがレヴァンティンで横薙ぎに斬りかかった。

「っ！やべっ！！」

「もう遅い！はぁー！！」

その横薙ぎが竜児にクリーンヒットし、後方にぶっ飛んだ。・・・ように見せた。その状況を見たなのはたちも

「なあ、これはもう竜児の負けでいいんじゃないか？」

「うーん、そうだね。私ちよつと竜児君を見てくるね。あ、フオワードのみんなも訓練に備えててね」

「。。。はい！」「。。。」

そう言ってみんなモニターから外れてしまった。だが1人だけ不審に思ったものもいた。その人物は、竜児が吹き飛ばされた場所まで行くところだった。

「真田よ。いつまで寝てるつもりだ？」

そうシグナムだ。彼女は一流の剣士。竜児があの一瞬で何をやったかを見抜いていた。

「ははっ、ばれてましたか」

竜児もそう言って起きだす。

「貴様は、あの横薙ぎが決まる瞬間にわずかにバックステップをし

てあたかも私の攻撃が当たったように見せたな」

「ええ、そうですね。幸いにもモニターで見てる人もいないしこのあたりにも人がいない。どうですか？お互いが今出せる最高の一撃で終わらせませんか？」

「ああ、いいだろう」

そう言っつてシグナムは

「レヴァンティン！カートリッジロード！！」

【Explosion！】

カートリッジロードをさせた瞬間レヴァンティンの刀身に強大な炎が纏う。それに竜児も身構え

「いくぜ！」

「来い！」

2人同時に走り出し

「ギヤラクティカ・・・」

「紫電・・・」

お互いが今持つ最高の技を繰り出す。

「マグナム（一閃）！！！」

「はぁーーーー！！！」

ドゴ　　ン！！

その音を頼りになのはが駆けつけてきた。

「2人とも何があつたの!!!」

なのはがそこで見たのは・・・技を繰り出しその衝撃で吹き飛び、  
気絶していた2人の姿であつた。

## 第十話（後書き）

フエ「お姉ちゃん、お姉ちゃん……」

竜「作者、フエイトさんの今の状況を説明しろ」

作「ええ、多分エリオとキャラクにお姉ちゃんと呼んでもらえたからじゃないでしょうか？」

「……考えられるのはそれしかないか」

「まあほつといて感謝コーナーと行こうか」

「ああ。ええサウザーさんエスカルゴさん、感想ありがとうございます。次回も読んでくれるとありがたいです」

「ああ、エリオ、キャラクもつと呼んでえ」

「……ではまた次回」

ええ少し補足をします

今回の必殺ブロー、ギャラクテイカマグナムは、本来ならばかなりの威力があるブローですが竜児はあの時パワーリストを外していませんでした。そのため本来の威力は出せませんでした。シグナムファンの方々すみませんでした。

## 第十一話（前書き）

ようやくできました。感想や質問、アンケートがあれば書いてください。待っています。

## 第十一話

その後……

竜児とシグナムは、そのまま医務室に連れ込まれてそのまま数時間は眠っていた。そして、最初に起きたのは

「あれ、ここは？」

「あ、竜児さん、起きたんですか」

竜児だった。そのまま体を起こして、軽く体操を始める。

「シヤマルさん、シグナムさんは？」

屈伸などを行いながらシヤマルにシグナムの容態を訪ねる。

「シグナムなら大丈夫よ。もうそろそろ起きるんじゃないかしら」

「そうですか。あ、そういえばシグナムさんのデバイスには異常はなかったんですか？」

「ええ、レヴァンティンには傷はなかったみたいそうよ」

「そうですか」

竜児がホッと一息いれる。そもそもデバイスの心配をしたのは、あのとき竜児の拳とシグナムのレヴァンティンが真っ向からぶつかり両方とも吹き飛ばされたからだ。

「でも驚いたわね。あのシグナムを気絶に追い込むのだから」

「いや、俺もこういふことになるとは思いませんでしたよ」

そうなのだ。本来のギャラクティカマグナムならば、風圧だけでも恐ろしい威力を発揮するブローなのだ。

「でも、シグナムはリミッター付きでもかなり強いのよ」  
「え！ リミッター付きだったんですか？」

シヤマルの言葉に竜児が驚く。

「そうよ。この六課の隊長・副隊長組にもリミッターが付いてるのよ」

シヤマルが続けて言っていく。

「そうだったんですか」  
「だからと言って手を抜いたわけじゃないぞ」  
「あ、シグナムさん。起きてたんですか」  
「ああ、たった今な」

シヤマルと話していたらその隙にシグナムが話し込んできてさっきの試合について尋ねる。

「ところで真田よ」

「なんですか」

「あのパンチは何だったのだ？ 私の紫電一閃と同等の威力のパンチなど」

「まあ、いわゆる俺の必殺ブローってどこですかね」  
「「必殺ブロー？」」

竜児の言葉に2人は首を傾げる。

「まあ一種の技とでも覚えていてください」  
「ム？ そうなのか。だったらこちらからは深くは尋ねん」  
「それより、今何時ですか？」  
「え、今は午後の9時過ぎね」  
「9時ですか！ 通りで腹が減るわけだ。今行っても食堂開いてるかわかんないし。…うーん、よし！」  
「どうしたの？」

いきなりのことにシャマルがどうしたのかと聞く。

「いや、丁度よかったから自分で作って食べようかなと思いついて」  
「え！？」 竜児君つて料理ができたんですか！」  
「そんなに驚かれても、まあ自炊ぐらいは普通にできますね」

竜児が言ったことにシャマルが驚き、シグナムも意外そうな目で  
見ている。

「シグナムさんもそんな意外だ、みたいな目で見ないで下さいよ。  
疑ってるなら2人も食べてみますか？」  
「すまん。しかしいいのか？」  
「はい、一応材料は買いためていて結構ありますから」  
「ふむ。ならばいただきますとしよう。シャマル、お前はどつする」  
「じゃあ、私もいただきます」

そう言って竜児たちは医務室を後にした。

そして、今部屋にはシグナム、シャマル、エリオがいる。エリオがいるのは、今竜児が使っている部屋がエリオと同じ部屋だからだ。

約20分後、竜児が料理を完成させ食卓の上へと並べていた。そして

「さあ、みんな食べてみてくれ」

そう言ってそれぞれ料理を食べだす。

「ム、美味しいな」

「ほんとです！ かなり美味しいですよ！」

シグナムとエリオが褒めてくれる中

「……………」

なぜかいじけているシャマル。

「あの…シャマルさん？」

「私が作ったのより美味しいなんて」

「え？ そうなんですか？ てつきり俺はシャマルさんも料理ができるんじゃないかなって思ったんですけど」

「いや、それはちがうぞ」

竜児の言ったことにシグナムが反対するように言う。

「『シャマルをキッチンに立たせるな』これは八神家の掟にもなっているしな」

「ま、マジですか？」

「ああ、マジだ」

竜児が確認するように聞くがどうやら本当らしい。

そんな話も出たがみんな満足していた。そして今はシグナム、シヤマルの2人が自分の部屋に戻っていきエリオも訓練の疲れからかぐっすり寝ているが

「……全然寝れねえや」

竜児は昼から気絶して結構な時間寝ていたためか寝付けずにいて外でシャドーをしていた。

「丁度いいし、ブーメラン・フックの自乗の威力を持つあのブローのイメージを完璧にしとくか」

竜児がそういうと目を瞑りだし集中する。そして

「相手のイメージは……そして」

何やらぶつぶつとしゃべりながらシャドーをして

「インパクトの瞬間！ 拳を相手の体に捻りこませる……！」

相手がいなかったためその拳は空を切ったが……

「これだ！ このイメージだ！」

どっちらつまくいったらしい。そこに

「フフ、頑張ってるね」

「誰だ！？ ん、ああフェイトさんですか」

フェイトが竜児に話しかける。

「竜児君。眠れないの？」

「ええ、なので体を動かそうかと思いましたが」

「そうなんだ。ねえ、竜児君」

「なんですか？」

「聞きたいことがあるの。竜児君はエリオのことで何か聞いたりした？」

「エリオのこと？ ああ、そういえばフェイトさん保護責任者でしたね。ええ聞きましたよ」

エリオのことを聞かれ竜児は聞いたと答える。

「そうなんだ、実はね私も扉の外で聞いてたんだ」

「え！？ そうだったんですか！」

フェイトがその話を聞いたと知り驚く竜児。

「でもね、うれしかったんだ。竜児君がエリオを人間だって認めてくれたこと」

「それって、どういうことですか？」

フェイトの言葉に竜児はその理由を聞く。

「実はね……」

フェイトの話では、自分の母プレシアが事故で亡くなった娘アリスアの遺伝子を使って作り上げた人造生命体、つまり自分も『プロジエクトF』で作られたものだと言ってきた。

「だから私は、自分と同じになっただけでほしくないからエリオやキャロを保護したんだ。ただの自己満足だけだ」

「でも、その自己満足な行動がエリオやキャロを幸せにしてるじゃないですか。それにフェイトさんが人造生命体だったとしても俺は驚かないですしね」

「っ！ どうしてなの！ だって私は「フェイトさんは人間じゃないんですか？」え！？」

フェイト話してるのを遮り更に話し続ける。

「正直、俺には人間と人間じゃないやつとの定義は心があるかないかでしか分かりませんよ」

「心？」

「そうです。どんな奴にも心があると実感できますから。それにフェイトさんは優しいじゃないですか。そんな人が人間じゃないとは思いませんしね」

竜児がそう言うとフェイトが泣きだす。

「うっう（泣）」

「わわっ！ どうしました？ いきなり泣いたりして」

「だって、そんなふうに言われたことがなかったから。うっう」

約10分後、フェイトは泣きやみ

「ありがとね、竜児君」

「いえ、大したことはしてませんよフェイトさん」

「ねえ、その「さん」って付けるのやめてくれないかな」

「え、でも……」

「ちゃんと呼んでもらいたいんだ。それと敬語も無しだからね」

フェイトの突如の提案に驚く竜児だが

「…分かった。努力するよフェイト。それと俺のことも普通に呼んでくれ」

「分かったよ。竜児」

「ふう、じゃ、寝るか。お休み」

「うん。お休みなさい」

そう言って竜児とフェイトは別れて就寝した。

## 第十一話（後書き）

作「…」

竜「…」

「竜児め、フラグを立ておったな」

「…？ フラグってなんだよ」

（この鈍感男が）

「うるせえ！ とりあえず全国のフェイトファンに土下座しろ！！」

「なんでそうなるんだよ！ 訳がわかんねえぞ！」

論争中…

は「ハア、感謝コーナーや。サウザーさん感想ありがとうございませう。それと感想や質問、アンケートもまっとうでえ。アンケートについては第二話と第七話を読んでやあ。

そこに書いてるから。ほなっ！ また次回や！」

## 第十二話（前書き）

ようやく書けた。今回は過去最長話です。ではどうぞ

## 第十二話

今、俺は休暇で地球の海鳴市へと来ている。その理由としては…

回想…機動六課部隊長室にて

「部隊長！ 何で俺みたいな魔導師ランクの低い奴がシグナムさんと戦わなければならなかったのか説明できるよな？」

俺はその日はやて部隊長に呼ばれ、部屋に入って開口一番にこう述べてはやてさんに迫った。

「いやな、初任務の時にやったあれがほんまに竜児君の力やないかなと思つてな。つい」

「ついつ。てことだけで俺はシグナムさんと戦うことになるのか…」  
「z」

「まあうちも悪かったと思うとるから、気分変えたらどうや？」

「どうやって気分変えろと！」

「とりあえず地球へ行ったらどうや？」

「地球へ？」

「そつや！ 休暇をあたえたる！！」

「そうですか。じゃあ行つてきます」

ということがあった訳だ。しかし海鳴市なんて名前は聞いたことないからなあ。とりあえず図書館とか行って情報を集めて見ますか。

約20分後…

ヤベエ、迷っちゃった。俺ここの地図なんて持ってねしなあ。お、あそこに人がいるじゃん。あの人たちに聞いてみよう。って、他に誰がいるじゃん。でも

「姉ちゃん達、暇なら俺たちと遊ばない？」

「ね、ねえアリサちゃん」

「いやよ。それに暇じゃないわよ」

「良いから来いよ！」

「きゃっ！」

「離しなさいよ！」

…いい雰囲気じゃあねえな。ここは1つ

「おい、何してんだよ」

ちよつと遊ぶか。

アリサ s i d e

今日、私はすずかと出かけていた。その訳は明日なのはたちが任務でここ海鳴市に帰ってくるからだ。任務とはいえはやてたちに会えるのはとても楽しみだわ。

「4年ぶりになるのかな？　なのはちゃん達に会うのは」

「そうね。頑張ってるのはいいけどたまには帰ってきてもいいんじゃないかしらね」

「あはは。アリサちゃん、それはちょっと」

こんな話をすずかとしていると

「姉ちゃん達、暇なら俺たちと遊ばない？」

いかにもチンピラ風な人たちが話をかけてきた。

「ね、ねえアリサちゃん」

ふう。すずかも嫌がってるみたいだし

「いやよ。それに暇じゃないわよ」

こう言ったけど

「良いから来いよ!」

ちよつと何するの。すずかにまで手を出して!

「きゃっ!」

「離しなさいよ!」

私たちが強引に腕を引かれたその時

「おい、何してんだよ」

聞き覚えのない男の人の声が聞こえた。

竜児 side

俺はその場に突っ立たままチンピラどもを見つめていた。するとその一人が

「なんだあお前は!？」

そう聞いてくるが

「粹がるなよ、ばか」

そう返す。すると

「何！？ 粹がつてんのはどっちだゴラァ！」

そう言つて3人同時に拳を振りかざしてきた。たく仕方ねえな。

「危ない！」

そう言つてくれたのはどっちだったかは分からなかったが、俺はそのすべてを避けた。

「扇風機か、お前らは？」

「少しぐらいはええからつていい気になっ……」

何か言おうとするも自分たちの今の状態に気づき

「あああつ……！」

「粹がつてるのは俺か、おめえらか？」

そう言いながらあいつらのシャツにしていたボタンを落としていく。

「あ……いや……」

「お、覚えてやがれー！」

そう言つてあいつらはどこかへ走つて行つた。

「ふっ」

「あの、ありがとございました」

「いえ、あんな奴らには慣れてますから。ところで」

「な、なによ？」

「図書館までの道のりを教えてくれませんか？」

「もしかしてこの町に来るのは初めてですか？」

「ええそうです。あ、俺の名前は真田竜児といいます」

「私は月村すずかです」

「私はアリサ・バニングスよ」

2人の自己紹介も終わって俺は図書館への道を教えてもらってその場は別れた。その時に、すずかさんの腕にあった機械を取っておい

その後俺は、図書館でこの世界の地球のことを調べていたがほとんど俺がいたこと変わりが無かった。ただ…

「俺の名前が載ってないだど！」

そう、5年前の高校インターハイの優勝者の名前が違っていたのだ。このことからここは俺が住んでいた地球とは違つのだと実感させられた。

「はあ、やっぱりここは違う世界なんだな」

図書館を出た後、俺は突きつけられた現実のため息をついていた。

(景色を見ているだけじゃわからないがなあ)

俺がそう思っていると

「！」  
（なんだ？ 今誰かから見られてる気がしたが、うん。よし、こ  
こはひとつ）

そう決意して俺は人通りの少ない場所へ入って

「おい！ そこにいるんだろ！ 出てきたらどうだ！」  
こう言った。すると

「ふ、発信機が一つしかなかったからどうしたかと思ったが、まさ  
か貴様が持っていたとわな」

発信機？

「おい、どういうことだ？」

「くく、貴様が今持っている機械が発信機だっていうことだよ！」

そう言っつて男は飛びかかってきた。

「あぶね！！」

俺はそれを間一髪で避け男のボディにパンチを浴びせた。

「ぐぼっ！ なかなかやるな」

「手を抜いたからな。それよりも発信機が一つしかなかったってこ  
とはもう何個かあるってことだよな？」

「ああそうさ。あのチンピラどもはいい仕事をしてくれたよ」

「仕事？ まさか！？」

「くく、気づいたかい。今2人の御嬢さん方は囚われの身だよ」  
そう言われた瞬間、俺の中の何かが弾けるように砕け散った。そしてそいつに近づき

「おい！ 今すぐ2人がいる場所に連れてけ！」

殺気を含めながら言った。

「は、はい！！ ただいま！」

どのどいつか知らねえが覚悟しとけよ！

すずか side

竜児君と別れた後私たちは一緒に帰ってたんだけど

キキーツ！ と私たちの前で車が止まり

「おい！ 乗れ！！」

と拳銃を突きつけながらいつてきた。拳銃があると抵抗もできないので私たちはおとなしく従っていた。そして、どこかの倉庫に着い

たときそのボスらしき風格の人が

「ククク、でかしたぞお前たち。ついに、ついに手に入れたぞ！  
月村の一族の一人を！」

「え!？」

まさか私のことを知ってるの。

「ちよつと！ あんた何が言いたいのよ！」

「おやおや、バニングスの御嬢さんは何も知らないんだな」

「何がよ」

やめて、言わないで。

「そこにいる月村の御嬢さんはね、きゅ「やめてー!」「」

「おや、話されたくないようだね」

(それを話されたら私は…)

そう思っていると

「ぐはあ」

誰かがドアを突き破ってきた。その人物は

「よう、お前がここにいる奴らのボスか？」

「な、なんだ貴様は」

「そんなことはどうでもいい。それよりてめえら五体満足でいられると思っなよ！」

今日知り合っただばかりの竜児君だった

「五体満足にいられるか？　だって。ククク、我々を相手にしてよくそんなことが言えますね」

「ああ（怒）外にいる奴らなら全員ぶっ飛ばしてきたぜ。後はてめえらだけだ！」

竜児は怒気を高めて言う。

「くそ、こんなことがあるのか。おい！　こいつを殺せ！」

「おお！　死ねえ！」

ボスらしき人物の一言でその場にいた10人がまとめてかかってきたが

「おせえ！」

俺はそいつらの攻撃を避けつつ、ボディやテンブルなどに強打を当て気絶させた。

「このやろつ！」

1人が銃で撃ってくるも、スッと竜児の体をすり抜けていったように見えた。

「おい、誰を相手にしてんだてめえ」

「何！？ この！」

男が続けて撃つもやはり竜児には当たらなかった。

「終わりか？ 次はこっちの番だ」

そういうと竜児は跳躍しそのまま相手に全体重の拳を落とす。ブローを繰り出した。

「ハリケーン・ボルト！」

「ぐわ！」

相手はそのまま倒れ、

「てめえも男なら拳でかかってこいよ！」

そう言いふらした。

「ぐぐっ」

「おいどうした、もう後お前1人だけだぜ」

その時ボスらしき人物は叫びだした。

「なぜだ！」

「ん？」

「なぜ、あのような吸血鬼を助ける！ あいつは今まで友を騙し続けた化け物なのだぞ！」

その言葉にすずかは落ち込み、竜児とアリサは驚いていた。しかし

「それがどうしたのよ!」

「なんだ!？」

「例えすずかが吸血鬼だったとしても、あたしの友達にはかわりはないんだから!」

「アリサちゃん」

アリサの言葉に続き竜児も言う。

「悪いがその2人とは今日知りあつたばかりなんだよな」

「ならばな」てめえらのやつてることが気に入らねえからだ」…」

「女誘拐してそのうえ銃を使うだあ。ざけんなよごら!」

「さらに人を化け物呼ばわりしやがって、本人じゃなくてもキレちまうぜ!」

竜児はそう言いながらそいつに近づく。

「お、おいやめる。やめてくれ!？」

「今更命乞いか? ふざけんなよ! それに最初に言つたよな五体満足じゃ済まさねえと」

「ひ、ひいいい」

男との距離を埋めたところに

「喰らいやがれ」ブーメラン・スクエア!」

「う、ぐわあ!」

竜児の新必殺ブローの『ブーメラン・スクエア』を決めた。ボスらしき男はそれを喰らって外に吹き飛ばされた。

「ふう、ふう、できたぜ。俺の新ブローが！」

竜児は拳を掲げてそう叫んだ。

その後、警察がやってきて誘拐グループは全員逮捕1人が救急車で運ばれた。俺は、すずかさんやアリサさんが手を回してくれたおかげで事情聴取をやらずに帰れた。良かった。

「すずか」

「アリサちゃん？」

「さっきも言ったけどあんたが何者であろうとずっと私の友達だから」

「ア、アリサちゃん。ありがとう（泣）」

うんうん。こっちもいい感じじゃん。すると2人がこっちに来て

「竜児さん。助けていただいて本当にありがとうございました！」

「あんたには感謝してるわ。……ありがとう（ボソッ）」

「すずかさん、アリサさん。気にしなくてもいいですよ。俺はあいつらが気に入らなかつたからやったまでですし」

「竜児、その敬語とさん付けはやめなさい！　なんかこっちまでおかしくなりそうだから」

「え、でも「私からもいいかな」……すずかさん」

フェイトに引き続きの提案に戸惑った竜児だが

「……分かった。これでいいか？　すずかにアリサ」

と笑って聞いたら

「／／／／！？」

2人は顔を赤くした。どうしたんだ？

「ところで今日泊まっていけない？　話したいこともあるし」

「え、それはこま、いいよね？」

「……はい」  
今、すずかの後ろに何か見えたのは気のせいか。何はともあれその日はすずかの家に泊まることになった。



## 第十二話（後書き）

アンケートを開きなおします。題名はスバル、エリオ、ギンガの魔改造についてです。

？ ・全員やってしまえー

？ ・スバルとエリオだけ

？ ・スバルとギンガだけ

？ ・スバルのみ

？ ・ギンガのみ

？ ・エリオだけ

？ ・エリオとギンガだけ

？ ・誰にもするなー

以上8個の中から1つ選んでください感想欄に書いてくれるとうれしいです。

またヒロイン要望もあればうれしいです。（作者は最近ハーレムを考えつつフラグを立てようと考えてます）∴ハーレムO・K？

プラス、皆さんはユ一なの派ですか？教えてくださいださればうれしいです。感想も待ってます。

ではまた次回

## 第十三話（前書き）

今回はすずかの家での話。それとアンケートはまだ続けます。よろしくお願ひします。

## 第十三話

その日、俺はさすがに話すことがあるといわれてさすがの部屋にいた。

「なあ、話ってなんだ？」

「えっとね、実は…その…」

（なんですすか？はモジモジしてるんだ？）

俺がそう思っているとさすがが口を開いてこう言った。

「夜の一族には掟があるんだ」

「掟？　なんだそれは、あれか、他の奴には話すなってやつか？」

「それもあるんだけど、もっと大事なことがあるの。それはね私と恋人のなることなんだ」

……はあ？

「すまん、もう一回言ってくれ」

「だからね、一族の秘密を知った人は私と恋人になるんだよ」

さすがが頬を赤らめて言っているがそれはないだろ。

「だめかな？」

さすがが賛否を求めてくる。しかし

「…あのな、俺はすずかとアリサとは今日が初対面なんだ。まああんなことにはなっただがいきなり付き合ってくれってのは正直困るな」

「でもこれは掟。仕方がないことなんだよ」

大事なことだもんな。さすがにとっては。でも、掟か。

「お前はそれでいいのか？」

俺は聞いたですようにさすがに聞く。

「何が？」

「掟によって契約されて恋人になっただとしてもお前は幸せなのか？」

「それは……」

さすがが少し動揺する。やはり気にかけてるのか？

「それでも」

俺が考えているとさすがが声を荒げて言う。

「それでも私たちはそうしなくちゃならないんだよ！」

「一族を守るためにか？」

「うん」

まあ普通は吸血鬼なんて退けられて当然なはずだがな。普通ならだ  
けど。

「なあ、俺たちはやっぱり初対面だしいきなりってのもなんか気が引  
けるんだよな」

「だったら」

「だからさ俺は、友達としての誓いを言わせてくれ」

「え？」

いきなりの提案にすずかも戸惑ってるがそんなのは気にしない。俺は言いたいことを言うだけだしな。

「俺は…夜の一族のことは誰にも話さない。それにできる限りならお前を守ってやる。恋人とまではいかねえが友達としてはいいだろ？」

俺はすずかの頭をなでながらこう言った。

「うん…うん（泣）」

すずかも納得したのか泣きながら頷いてくれた。

「ところでさ、アリサと俺以外には言わないのか？ お前の正体のこと。アリサ以外にもいるんだろ大事な友達が」

数十分後、竜児は泣きやんだすずかに対してこう質問していた。

「うん、いるよ。十年以上付き合ってくれた友達が。でも私の正体を知ったら…」

「怖いのか？ 知られるのが」

「うん。知られたらもう友達じゃなくなるのかなって思うと怖いんだ」

そう言うすずかに対して竜児は

「じゃあその縁を切っちまえよ」

冷たい目をして言い切るのだった。

すずか side

「じゃあその縁を切っちまえよ」

そう言われた時、私は怒りが込み上げてきた。

(どうしてそういうことを言うの?)

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

「なんでなの！ 私たちのことを何も知らないくせに！..」

私は怒りにまかせて竜児君に言った。どうしてそういうことを言うのかと。すると竜児君は

「お前はその友達のことを本当に信頼しきってるのか？」

「え？」

こう言ってきた。

「もちろんだよ」

私の答えはもちろん”yes”だ。私たちの絆は固いものだから。

「だったらお前の秘密も話ていいんじゃないか？ 辛いんだろ、そのまま騙し続けるのも」

「！」

そうだ。今の私はみんなを騙して生きているんだ。ずっと…怖かったのだから。そう思っていると竜児君がもう一度頭をなでてくれた。「大丈夫だよ。今日初めて会った俺でもわかる。すずかは優しい子だからな……お前の友達たちも受け入れてくれるさ。現にアリサは受け入れてるじゃねえか」

そう言ってくれた。

（ほんと、私は何を悩むことがあったんだろう。アリサちゃんが受け入れてくれたのにあの子たちが受け入れないなんてことはないもんね）

「竜児さん」

「なんだ？」

「本当にありがとうございます。あなたのおかげで勇気が出ました。私話します。自分自身の本当のことを、なのはちゃん達に」

そして、前に進むんだ！

竜児 side

…なのは…ちゃん？

「なあ、それってもしかして苗字が高町ってことはないだろ？」

そっだ。人違いってことも

「え？ そっだけど。竜児君、なのはちゃん達のこと知ってるの？」

マジかよお！ ということははずか友達たちってなのはさん達のことだったのかよー！

「ちなみに明日任務でこっちに来るってはやてちゃんが言ってたよ」

……なにいいい！ ということははやてさんはそのことを見越して俺をここに行けって言ったのか！

「フッフ、計算通り（ドヤ）」

「主、何をしているのですか？」

その時1人の女の顔が月になっていたとかいないとか。

「あの、大丈夫ですか!？」

「ハハハ……あのためき部隊長があああ！」

また一つ夜は更けていく。

### 第十三話（後書き）

作「お前はどこまでフラグを立てれば気が済むんだ」（手には爆弾があります）

竜「おい、ほんとになんだよ」

「もういい。せめて痛みがないうちに安らかに眠るがいい。いくぞ」

「って爆弾投げながらそんなこと言うなよ！ うおっ！ あぶね」

「ええい！ 避けるな！ すぐさま爆発して死ねえい」

「うるせえ！ スペシャル・ローリング・サンダー！」

「ぐげらば！」

フェ「あはは、みなさん感想・質問・アンケートなど書いてくれればうれしいです。次回もよろしくお願ひします」

## 第十四話（前書き）

アンケートや感想など待っています

## 第十四話

地球へきて2日目、竜児はあの後用意されてた部屋で寝ていた。

「フワア、よく寝たな。そろそろ起きなきゃな」

そう言っただけで起きたのが朝の7時である。

「あれ？ 昨日の今日だから疲れたのかな。まあいいか」

いつもなら早く起きてロードワークに行っているのだが、竜児にとっては少し寝すぎたのである。その後顔を洗った後、竜児は食堂へと足を運んだ。そこにはすでにすずかとメイド服を着た2人の女性、ノエルとファリンがいた。

「おはようございます竜児様」「」

「ああ、おはよう。すずかもおはよう」

「おはようございます竜児さん」

「なあ、こっちは敬語じゃねえしすずかも敬語じゃなくていいぜ」

「え？ う、うん分かったよ」

竜児の言うことに頷くすずか。そして竜児はさらに話し出す。

「しかし、悪いな1晩止めてくれるだけじゃなく朝食までご馳走になるなんて」

「ううん、いいんだ。これもお礼の一つだしね。それより竜児君はこれからどうするの？ 今日にはやてちゃん達がこっちに来るから一緒に行動するの？」

さすがが今後の行動について聞いてくる。

「いや、やめとく。それよりここの地形を覚えたいからロードワークでもするわ」

「そ、そうなんだ」

「あ、そういえばここら辺で良い店とかある？ できれば教えてほしいんだけど？」

「それなら翠屋ってところがあるよ。地図書こうか？」

「お、ありがとよ」

そんなやり取りをしていた朝食であった。

「ほんとに行かないの？」

「ああ、アリサと出かけるんだろ？ 俺のことは気にする必要はねえよ」

朝食後少しゆっくりした後竜児はロードに出るために外に出ていた。

「じゃあ行ってきますか」

「うん」

そして竜児がロードに行った数分後…

「あっ、来たみたい」

さすがが反応した人物は

「はやてちゃーん！」

べつやはやてとヴォルケンリッターの面々らしい。

竜児side

「フッフッフハッハ」

タッタッタ……ダダダ！！

俺はダッシュとジョギングを交互に繰り返す走りをしていた。

「ハッハッハッハッ」

しばらくして、河原まで走ってきてそこに一本の木を見つけた。

「丁度いいや」

竜児はその木に近づいて

トン。

シュ、ババババババババババ！！

「ふう、こんなもんかな」

その手を広げたら手のひらには10枚の葉っぱがあり、それがひらひらと落ちていった。

ロードワークが終わった俺は近くにあったコンビニでボクシング雑誌を買ってすずかに教えてもらった翠屋へと向かった。

「いらっしやませー」

入口へ入ると眼鏡をかけた女性がウェイターをやっていた。そして

「ご注文は何にいたしましたでしょうか？」

「えっと…」

俺が何にしようか悩んでいると

「でしたら当店のおすすめがありますがそれにいたしますか？」

と聞いてきたので

「あ、じゃあそれをお願いします」

それに乗せてもらった。

「畏まりました。注文はいましたー！」

そう言って行った後俺は早速さっき買ったボクシング雑誌を読んでいた。

ペラ、ペラ、ペラ……

「ご注文の品をおもちいたしました」

……

「あの？」

……

「すみませーん」

…はっ！ 夢中になりすぎたか。とりあえず受け取らないと。

「すみません。夢中になりすぎまして」

と俺は注文の品を持ってきた男性に言っていた。というか

(結構若いな)

そう思ってしまった。すると

「君は格闘技か何かをやっているのかね」

と聞いてきた。

「ええ、まあボクシングをしています」

「そうか。いや君がその雑誌を見てかなり震えてるように見えたからね」

震えている？ 俺が？ そう言われて手を見ると

(確かに震えてる)

「戦いたいのかい？ そのチャンピオン達と」

戦いたい…か。 そうだな

「そう…ですね。正直戦いたい。今こいつが一番強いのならすぐにも戦ってそのうえで勝つ。そのためにボクシングやってるもんですから」

「そうなのか」

「ところで、あなたも何かやってたのですか？」

「ああ、今はやめてしまったけど剣術をね」

「そうなんですか」

そう言ってその男性は奥に戻っていった。

俺がここでゆっくりして数十分後

「お母さん！ ただいま！」

誰かが帰ってきたようだが俺は思わぬ再会？ を果たしてしまう。

「なのはー！ お帰り！」

（なのはさん！ しかもあの人がなのはさんのお母さんとか…若すぎでしょ（汗）ということは）

「お！ なのはー！ 帰ってきたな」

「お帰りーなのは」

「お父さん！ お姉ちゃん！」

やっぱりかあ！！ 予想はできたけどほんとに若いな！

「ああ、この子たちは私の教え子の」

「ス、スバル・ナカジマです」

「ティアナ・ランスターです」

「スバルちゃんにティアナちゃんね」

「それと、あ！ 竜児君！」

俺が黙ってその光景を見ているとなのはさんに見つかってしまった。

「え！？ 竜兄？ 地球に来てたの？」

それに便乗してスバルも言ってくる。

「ああ、休暇をもらって来たんだよ。とりあえず、お会計と先ほど話しましたが名前は言ってますでしたね。真田竜児です。以後お

見知りおきを」

「ああよろしく。私のことは士郎で構わないぞ」

お互いの自己紹介も終わり

「フェイトちゃんと待ち合わせ中なんだけど、居ても平気？」

「もっちらーん」

というところでフェイト達に来るまでゆっくりすることになった。

フェイト達と合流した後俺たちはコテージに移動した。そこにはアリサやすずか達もいた。

「あ、おかえりー」

「なのはちゃん、フェイトちゃん」

「すずかちゃん」

「すずか」

「竜児も1日ぶりね」

「ん、ああそうだな」

とアリサが言うとフェイトが

「ねえ、なんで竜児とそんなに親しいの？」

となんか黒いオーラを出しながら聞いてきた。

「昨日会って色々あったんだよ」

「フーン、そうなんだ」

「なんなんだ、いったい」

「そういえば、なんでフェイトちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんには普通に話してるの？」

「そっやで！」

「わっ！ 驚かさないで下さいよ」

俺はいきなり出てきたはやてさんに驚くも

「それや！ それ！ 何でうちらにも普通に接してくれ入んの？」

「そっだよ！」

何で怒られてるのは知らんがつまり

「普通に接してほしいということだな」

「「うん」「」

「わかったよ。たく」

なんか疲れるな。

そんな話をしていると一台の車が来てその車から美由希さんと後2人の女性が降りてきた。

「はぁーいー！」

「みんなー、仕事してるかー？」

「お姉ちゃんズ参上！」

「エイミーさん」

「アルフ！」

「それに美由希さん」

どうやらあの2人はエイミーとアルフというらしい。それよりも

「美由希さんさつき別れたばかりでしたよね」

「いや、エイミーがなのは達と合流するって言っから。私も丁度シフトの合間だったし」

「エリオ・キャロ、元気だった？」

「はい！」

エイミーに元気だったかどうか聞かれて元気よく返事するエリオとキャロ。更に

「2人ともちよつと背伸びたか？」

「ははっ、どうだろう？」

「えへ、少し伸びたかも」

みんなが話し込んでいたので竜児は鉄板の前で料理をしていたはやての所へ行った。

「なあ、はやて。なんか手伝うことはないか？」

「竜児君料理できるん？」

「ああ、趣味でやってたことだしな。一応味も保証できるぞ」

竜児がそう言うと

「主はやて、真田が言っていることは本当です。なあシヤマル」  
「うっう（泣）」

シグナムがそういうとシヤマルが泣きだした。

「私料理下手じゃないもん（イジイジ）」

やはり体育座りをしてしまった。

「まあこついうわけだしな」

「うん、分かったわ。じゃあよろしく」

そう言って料理を再開した。そしてしばらくしてから食事を開始した。

## 第十四話（後書き）

最近なのはとユーノを恋人同士にさせようかなと思っていたりします。皆さんはどう思いますか。意見があればメッセージや感想に書いてください。

そして乱立？ するフラグ。どう回収しようか。

## 第十五話（前書き）

今回の話でエリオとキャロの仲が…

## 第十五話

「食事と飲み物はいきわたったかな？」

「うん、大丈夫」

「それじゃあ、食べようか。いただきまーす!！」

はやての号令でみんな一斉に食べ始めた。

「おっこれ美味しい。やっぱりはやての料理はギガうまだな!！」

ヴィータはそう言いながら食べていくが

「あ、それはうちだけで作ったんちゃうよ」

はやての一言でヴィータが凍りついた。そして恐る恐る聞いてみた。

「な、なあはやて。もしかしてこれ作ったのって、シャ…シャマル  
じゃねえだろっな」

もしこれがシャマルが作ったものだとすれば、明日は確実に大雨いや天地がひっくり返る（かもしれない）  
ということが起きる。

「ヴィータちゃんなにを」ああ、それ作ったんはうちと竜児君やか  
ら心配せんでも平気やで」はやてちゃんまで…orz」

はやてにまでそう言われたシャマルは本日2度目の落ち込みであったがそこに1人の人物がシャマルに手をかけた。

「大丈夫よ、シャルさん」

その手をかけた人物とは…

「美由希さん！」

そう高町なのはの姉である美由希であった！ 実はこの美由希も料理がへ「何か言った？」

いえ、なんでもありません！ まあとにかく

「2人で一緒に上達していきましょう！」

こんな風になってるのは置いといて

「え！？ これほんとに竜児が作ったのか？」

とヴィータが聞いてくるので

「ええ、そうですよ。まあ趣味程度でやってるんですけどね」

こう答えていた。

「へえ、竜児って料理もできたんだ」

「兄さんの料理は美味いんですよ」

「エリオって竜児の料理食べたことがあるの？」

「はい！」

エリオとスバルの竜児の料理の話になり

「ええーいいな。竜児、私にも作ってよ」

「そうだよ竜児君」

スバルが竜児に料理を作ってくれとお願いしたら、フエイトやすずか達まで言ってきた。

「ふう、分かったよ。また今度暇があれば作ってやるよ」

「え！ 本当！ やった」

それを聞いて喜ぶスバルであった。

「ごちそうさまー！」

その後、自己紹介などをして親睦を深めあいながら食事を済ませた。

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

「はい！……！」

はやてがそういつと皆返事をした。

「まあ監視といってもデバイスを身につけてればそのまま反応確認できるし」

「最近はほんとに便利だね」

「技術の進歩です」

とそんな会話をしているとアリサが

「ああ、ただここお風呂ないし…。湖で水浴びって季節でもないし…」

と言った。そこに

「そうすると…」

「やっぱり」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう！」

とある場所が提案された。そして

「それでは六課一同、着替えを準備して出発準備！」

「これより、市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー？」

「銭湯？」

スバルとティアナは疑問を口にしエリオとキャロもわからないといったしぐさをしている。そしてエリオが

「兄さん、スーパー銭湯ってなんですか？」

と聞いてきた。

「ん？ 銭湯だったら市民の憩いの場だけど…まあそれと同じような場所じゃないか？」

竜児もこの町にくるのは初めてなので少しわからないと言った口調で話している。そして少し気になることがあるのかすずかに近づい

た。

「なあ、まだ話さないのか？」

「え？ ああ、うん。皆が無事に仕事を済ませたら言おうと思うんだ」

「そうか」

「おおーい！ 何してんだ？ 皆行っちまっぞー！」

「おっと、まあうまくいけばいいな」

「うん」

そう言って皆について行った。

そして、スーパー銭湯に着いた。

「いらっしやいませ！ 団体様ですか？」

店員がこちらの人数の多さに驚きつつもきちんと接客をしてくる。

「ええと…大人13人と…」

「子供4人です」

「エリオとキャラ口と…」

「私とアルフです」

「うん！」

そんな中スバルがヴィータを見て

「えっと、ヴィータ副隊長は？」

そう聞いたが

「私は大人だ！」

と言って怒られてしまった。

「はい！ では、こちらへどうぞー！」

「あ、お会計しとくから先行っててな」

「はい！！！！！！」

「あつ、良かった。ちゃんと男女別だ」

エリオが「男」と「女」で分けられた垂幕を見てほっとしていた。

「ん？ 公共の施設だからそうなってるだろ普通」

「広いお風呂なんだって、楽しみだねエリオ君！」

「あ、うんそうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

「え？ エリオ君は？」

「ぼ、僕は…ほら！ 一応男の子だし」

「お前、男だろ」

エリオの曖昧な発言に竜児が突っ込むが

「でも、ほら！ あれ」

とキャラロが指をさした方向には注意書きがあり、そこには『女湯への男児入浴は11歳以下のお子様のみお願いします』と書かれていた。

「フフ、エリオ君10歳！」

「い…あ」

そしてそこにフェイトも加わる。

「せっかくだし、一緒に入ろうよ」

「お姉ちゃん！」

「い…いや、あのですね、それはやっぱりスバルさんとか隊長たちとか、アリサさん達もいますし！」

エリオも負けじと言うのだが

「別に私は構わないけど？」

「てゆうか、前から『頭洗ってあげようかあ』とか言ってるじゃない」

「ウツ、う」

「私らもいいわよ。ね」

「いいんじゃない？ 仲良く入れば？」

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は久しぶりだし、入りたいな」

期待がことごとく裏目に出て困っているエリオに童児が

「皆、エリオが困ってるじゃねえか」

と助け舟を出した。

「兄さん！」

「ほら、エリオ行くぞ。じゃあ皆、俺たちはもう行きますね」

と言って男湯へ入っていった。約2人は不服そうな顔をしていたが。

そして2人は脱衣所で服を脱いで風呂へ入っていった。

「おお、でかいな」

「そうですね」

2人は風呂のでかさと湯の数に驚いていた。

「よし！ エリオ、体洗うぞ」

「はい！」

そう言つて2人は体を洗い、湯につかった。

「兄さんの体、すごいですね。筋肉が引き締まっています。何かしてたんですか？」

「ん？ ああボクシングをな。まあ鍛えても試合に勝てなきゃ何の意味もなくなるけど」

「へえ、そうなんですか。僕もこんなふうになれるかな？」

「なれるさ。鍛えていけばな。それよりもさ」

竜児はエリオに質問をする。

「お前、キヤロのことどう思ってるんだ？」

「え！？ に、兄さん！ 何を言ってるんですか！ ぼ、僕とキヤロは別に…／＼／＼」

いきなり質問されて困っているエリオだが

「いや、お前らってさ仲がいいじゃん。だからさ、もう告白とかしたんだろ？」

「え、えつとですな僕は…」

「まあ、それはいいとしてだな。早く思いを伝えないと、誰かにとられちゃうかもよ？」

「うっ…」

とそんな話をしていると

「お兄ちゃん、エリオ君！」

キヤロがやってきた。

「うわ！ キヤロ！ なんで？」

「噂をすればなんとやらってやつか」

「私も10歳だから男湯に入っていって係員さんが言ってたんだよ」

キヤロはそう言っているが

「平常心！ 平常心！」

エリオは平常心を保つのに精一杯のようだ。

「そうだ。お前ら2人とも子供用の露天風呂があるからそっちに行つて来いよ。空も見れて気持ちいいぞ」

と言ったところ

「はい！ じゃエリオ君、いこつ」

「うん」

「あ、そうだ。エリオ！」

「はい？」

「頑張つて伝えるよ」

竜児がそういうと言葉の意味が分かったのか緊張しながら行つていた。

「さてと」

エリオ達が向こうに行つた後竜児も外の露天風呂へと行つた。

エリオside

「はあ、すごい。ほんとに空が見れるんだね」

「う、うん。そうだね」

僕たちは、兄さんに言われて外の露天風呂に来ていた。そこには、

『子供用露天風呂、12歳以上の男子の男子立ち入り禁止』と書かれていた。だから

(とりあえずここなら、僕もキャロもなんというか、こっつ…大丈夫多分)

そう思っただけでも

『頑張って伝えろよ』

兄さんのこの言葉を思い出すだけで緊張してくる。すると

「エリオ君顔真っ赤だけど、私迷惑だった？」

キャロがこう言ってきた。え！？ 今僕顔真っ赤なの？ とそんなことじゃない。

「うわあ！ 大丈夫！ 大丈夫」

僕がそう言うと、キャロがタオルを取り出して

「タオルを冷たい水につけて、エリオ君のおでこに…んしょ」

そう言って僕のおでこに当ててきた。

「冷たっ」

「ひんやりして気持ち良くない？」

そう言われてみれば

「ああほんとだ」

「昔、フェイトお姉ちゃんと一緒に温泉入ってて私のがぼせちゃったときお姉ちゃんがしてくれたの」

「そうなんだ。ふう、本当に気持ちいや」

「うフフ、もうちよっと水をくえい！」

僕が気持ちよくなっているところにキャラはさらに水をかけてきた。

「えふ、キャラ、冷たいよ」

「フフ、「あはは」」

「よかった。エリオ君やつと笑ってくれた」

「え！？ その、あの」

「ううん、あのねいつも訓練とか忙しいし、エリオ君真面目だからお仕事中に無駄話とかしないし、初出勤のリニアレールの後からずつと言いたかったの！ ありがとうエリオ君。いつも助けてくれて、守ってくれて」

キャラがそう言ってくれたがそれを言いたいの僕の方だ。

「それは僕も同じだよ。リニアレールの件ならキャラとフリードは命の恩人だよ。それに…」

『キャラのことどう思ってるんだ？』

兄さんに聞かれたことを思い返す。僕はキャラのことが……

「？ エリオ君？」

キャラに名前を呼ばれる。そう僕はキャラのことが

「そ、それに僕はキャラのことがす、すす好きになっただんだと思う」

「！ エリオ君！」

僕は今の自分の思っていることをキャロに伝えた。

「これが、この気持ちがあるのかは分からないけど、僕はこれからもずっと君を守りたい。そして…

この気持ちがあるのか分かった時にちゃんと伝えるから、それまで待っていてほしいんだ」

「エリオ君。うんわかったよ。だから、これからもよろしくね！」  
「うん！」

とりあえずこの2人のコンビの中がかなり進展した瞬間であった。

## 第十五話（後書き）

エリキヤロの案は友達からもらいました。でも、まあこっちの方がいいような気がします。次回。は…やっぱはাতেには暴走しかないでしょ、うん。ということで女湯の様子を書きます。

は「次回は私が活躍（乳もみまくる）するでー！」  
作「うわ！　なんか本音が見えるわこのコメント」

それとアンケートについてもし改造するのならばエリオには真剣扇風機をスバル・ギンガにはパワーリストをしてもらいます。これも踏まえてアンケートにお答えしてもらえればと思います。

## 第十六話（前書き）

前回から1ヶ月以上も経ってしまいました。もし、この小説の投稿を待っていたという人がいたのならば、待たせてしまっすいませんでしたあああ！

？「にやあ」

作「ん？ いやあああああああああ！！！」

## 第十六話

竜児とエリオが風呂に行っている間女子風呂では

「うわ、すごい、きれい！」

「本当！」

「スバル、ティアナ、おいで。お湯の使い方とかお作法とか教えてあげる」

「はい！」

スバルとティアナは初めてくる銭湯に驚いていたり

「へ、なんかずいぶん変わったな」

「湯の数も増えた。仕事中にはなければゆっくり楽しめたのだがな…」

「いいじゃない、反応があったらすぐに出来るようにしとければ」

「前線はそうもいかん」

「曲がりなりにも副隊長だかな」

「はいはい」

副隊長たちも楽しんでいるようだ。ただ1人を除いては…

はやてside

「フッフ、ついに、ついにこの日がきたでー!!」

この日を、この日を何度待ち焦がれていたんやろうか。温泉と言えば露天風呂に卓球、さらにはサスペンスが定番やと思われがちやがそうやない！ やはり1番の定番と言えは女子のスタイル、つまり胸や！

女子の胸にはいろいろなもんが詰まっとる！ その胸を揉むことこそが私にとっての生き甲斐なんや！

「さあ、いざいかん女子風呂へ！」

「はうあっ！ はやてちゃんが壊れたですう」

リンがなんか言った気がするがそんな無視や！

作者 side

「それにしても、なのは相変わらずスタイルバランスがいいわよねえ」

「え？ そうかな？」

「そうやで〜！ 特にその胸なんかとくにやー！」

アリサとなのはが話している間にはやてが割り込み突然なのは胸

を揉んできた。

「ちょ、はやてちゃん！ なにしてるの！」

「何ってそれはなのはちゃんの胸を揉んどるんや！ ほれほれ、ここがええんか？」

「にゃ！ そこ…は…だ…だ…だめ、あつ！」

はやての胸揉みテクニクによりなのははだんだん敏感とかがしていくのだが、その行為を許さないものがあるわけで…

「は〜や〜て〜ちゃ〜ん〜（怒）」

「ん？」

はやてが振り返るとそこには

「なのはになにしてるのかな！」

なんかすごい怒気のオーラを纏ったフェイトがいた。

「私ですら、なのはの胸なんか揉んだことないのに…はやてはそれを、それを！」

とはやてに怒っているが（何か違う気もするが）

「フフフ、そう言うんやったら、フェイトちゃんの胸も揉んだるわ！」

そう言いつつなんかなのはの兄の恭也や当のフェイトですら驚愕するほどのスピードでフェイトの後ろに回り込み

「そりゃ!」

「キヤ! は、はやて!?!」

「今の私は、阿修羅すらも凌駕する存在や! ほりゃほりゃ、む、フエイトちゃんまた大きくなつたらんか?」

「や、やめ……アツ! ン、そこは、だ、だめ……だよ……はっ あ  
ン!」

…何かアダルトチックな展開となってきたが大丈夫だろうか?

「ハハハ! 大丈夫や、もう私は誰にも止められんぞ!」

はやてがそんなことを言っているが気にしない。それでほかのメンバーはというと、シグナムやシャマルははやてのそばからすぐ離れ美由希やエイミー、アルフにせずかはその場を楽しく見守っていたりヴィータとリインフォースは自分の胸を見てからうれしいのやら残念やら複雑そうな顔をしていてスバルは目をキラキラさせながら見ているティアナはそんなスバルに呆れていた。そしてアリサは。

「やめなさいよ!」

「痛っ」

ビシツとはやての脳天にチョップを決めていた。そしてはやてはその場につずくまっ

「むっ、まさか今の私を止めるとは、お主やりおる」

「もう、やめなさいよね。今は私たちがいなくなつたからよかったけど」

とアリサは呆れ気味にはやてに言うが

「な〜にいつとんのや。こんなチャンス滅多にないんやで！ それに今の私をこの程度で止められると思ったら大間違い」「はやてちゃん」……や？」

はやては今の自分は止められないと主張していたが、不意に後ろから聞こえた声によってそれは止められた。はやてがゆっくりと後ろを向いてみると

「本当に何してるのかな？」

なんかものすごいオーラを纏ったずかささんがいた。その姿はあの時竜児が見たものと同じである。

「いや、ハハハ冗談やよ冗談。さあてゆっくりお風呂にでもつかろうか？」

ずさかのオーラの何かに冷や汗をかいたはやてはその場をそそくさと去って行った。その場に居合わせた人は後に、「あの場には魔王以上の何かがあった」と口をそろえて言ったという。

「ふう、外の風呂つても気持ちいもんだなあ」

エリオと別れて露天風呂に来ていた竜児は夜空を見上げながら風呂に浸かっていた。だが竜児はここに来る前にある注意事項を読んでいない。よって

「りゅ、竜児君！」

「へ？ つてなのはあ！」

そうここは混浴となっているのだ！ その注意事項を知らないがために

「何でなのがこのにいるんだよ!？」

「りゅ、竜児君こそどうしてなの!？」

こうして男女が鉢合わせすることもあるのだ。ちなみになのはははやての乳揉みから逃げるため、外の露天に来ていたのである。

「と、とりあえず俺は先に出る「待って!」ん？」

「もうちょっといいかな？ 少し話もしたいから」

なのはに話をしようと言われたために竜児はもう少し残ることにした。もちろん2人の距離は取ってある。

「ねえ、竜児君」

「なんだ？」

突如なのはから話をかけられそれに答える竜児。

「この街はどうだった？」

「この街？ ああ海鳴市のことか。いい街だよここは。優しい人がいて、風も気持ちがいい。そして近くに海があるもんな。本当にいい街だよ。そういえばなのはも海鳴で育ったんだよな？」

「うん。そうだよ」

「こんなこと聞くのも野暮ってもんだが、どうして魔導士になったんだ？」

竜児は思っていた疑問を聞いてみた。ここは地球、魔法が栄えてい

るミッドチルダとは全くと言っていいほどつながりが見つからないものだ。ならばなぜ、なのはやはやてといった地球育ちの者が魔導士をやっているのかという疑問が生まれてくる。

「魔導士になつた理由？ それはね……」

なのはは自分が魔導士になつたきつかけを話した。

「ふうん、願いがかなうといわれるといわれるロストログア、ジューエルシードねえ」

「その時に会ったユーノ君を助けるために魔導士になつたんだよ」

「へえ、ということは2人とも付き合ったりしてるのか？」

竜児が2人が付き合ってるかどうかと試みてみると

「にゃ！ そ、その…ユーノ君や私は仕事が忙しいから……ってそれよりも竜児君は何で魔導士に？」

なのはは急に焦りだし話を強引に変えた。

「俺か？ まあ俺は成り行きっていうか流れたになったな。というか俺は魔導士というよりはボクサーって言った方がしっくりするけど」

「ボクサー？ と言うことは竜児君ってボクシングとかやってたの？」

「まあな、つっても5年前のあの日から試合してないけど、参ったな。試合勘とか鈍ってなきやいいけど」

と竜児がそう言つと

「ねえ、それならスバルと試合やってみない？」

なのはがいきなりそう言ってきた。

「し、試合って、まさか模擬戦じゃないですよね？」

「ううん、そうじゃなくて魔法なしの試合だよ。それならいいよね？」

「ま、まあそれならいいですけど…FW陣の訓練の支障とかになりませんか？ それに試合についてもこっちはボクシングですからリングとかも必要になりますし…」

竜児はFW陣の訓練に差支えないかと言うが

「大丈夫だよ、リングとか必要なものは竜児君が言ってくればこっちで揃えるし、それにガジェットだけの対策じゃだめだしね、それにスバルも喜ぶんじゃないかな」

「まあ俺にとってみれば願ったり叶ったりな話だからな。その試合、受けます」

「わかった。スバルには私から話しておくね」

その後、竜児はのぼせそうだからと言って風呂から上がりロビーに行った。そして全員がロビーに揃って何分か後にサーチャーに反応が出た。機動六課のメンバー達は現場への移動。現地協力者たちはコテージへの移動となった。

「兄さんはいかないんですか？」

「俺はこっちには休暇としてきてるからな。仕事はお前らの方だろ。頑張ってこいよ」

「はい！」

結果的にはスライムみたいなロストロギアはキャロやティアナの活躍があつたおかげで素早く封印することができた。そしていざ帰ろうかと言つ時に

「ねえ今日は泊まって行かない？」

さすががそう提案したが

「そうは言つても」

「向こうを開けておくままにするのもちよつと」

「そつやねえ」

隊長達3人は否定的だったが

「私ね、なのはちゃん達に話さなきゃいけないことがあるんだ。だから、お願い！」

さすがが頭を下げてまでお願いされたことや話したいこと言つのが気になったことで1晩泊まって明日の昼ごろに六課に戻ることにした。1つの部屋に集められたなのは、フェイト、はやて、シグナム、シヤマル、ヴィータ、アリサがいた。そこで話したのはさすがが夜の一族と呼ばれる吸血鬼と言つことと今までみんなを騙していたことについての謝罪であつた。

「みんな、本当にごめん！」

「なにいつてるの、私たちはこれまでと変わらずずっと友達だよ」

「そつだよ、さすががなんだろうと私たちはきらいになつたりしな

いよ」

「そつやですずかちゃん」

なのはたち3人はそんなすずかに対してずっと友達だと言って守護騎士とアリサもそれにうなずいていた。そのことにすずかは

「みんな、ありがとう（泣）」

泣きながらも喜んでいた。

その後自分たちもミッドチルダについていくと言い出し、またまた困りだす隊長陣だったが……すずかがはやてを呼び出した数分後、はやてからついてきてもよいと言われたらしい。すずか……恐るべし！





第16・5話（前書き）

今回は短編？ みたいなものとして読んでください。そして奴が初登場！？

## 第16・5話

今俺は非常に驚いている。なぜなら

「なんで、もうリングがあるんだよ……」

そう、俺の目の前にはリングがある。すずかとアリサがこっちに来るっていうのも驚きだったけどまさか帰ってきて3日程度でリングまでできるとわな。

「驚いたやろ」

「はや、部隊長」

「ええよ、普通に呼んでも」

「ああ、はやて。でもいいのか？ 本当に試合なんかしても」

俺は再度確認してみるが

「そのことなら大丈夫やよ、それに」

俺ははやてに言われて後ろを向いてみると、なのはや副隊長達、それにFW陣までいた。その中でもスバルは嬉しそうにして俺に声をかけてきた。

「竜兄！」

「スバル、悪いな、こんなことに付き合わせちまって」

俺はそう謝るが

「謝らなくていいよ竜兄、私もなのはさんから話を聞いたときはび

つくりしたけど楽しみなんだ」

スバルからその言葉を聞いたとき内心ほっとした。

「よし、お前がそういうならさっさとやろうか。グローブもつけてることだし、ルールの確認だ。」

「はい！」

「ボクシングじゃ足は使わずに手だけを使う。1ラウンド3分間でそれを3ラウンドまで続ける。ダウンは1ラウンド3回までで1ダウン中に10カウント数えられたら負けだ。カウントはリーヴに任せる」

『分かりました、マスター』

「まあ、大まかなことはこれぐらいだな。質問は？」

「ないよ」

「オツケー、じゃやろうか」

そういつて俺とスバルはリングへと上がった。

作者 side

「じゃあ、試合開始！」

なのはがゴングを鳴らしたことにより試合が開始された。

(これが5年ぶりのリング。懐かしすぎるな)

竜児がリングに上がったのを懐かしんでいると、スバルが特攻を仕掛けてきた。

(いくら竜児といえど、負けられない！)

竜児の顔面へ威力がある右のストレートを打ってきた。ドゴン！という音を鳴らしたが竜児は間髪をしないでいたようだ。だがその衝撃により後ろへと吹き飛ばされる。それをチャンスだと思ったスバルが一気に攻めたてる。右と左を交互に出し続け、アッパー、ストレート、フックと出していく。スマートとは言えないが当たれば確実にK・Oになる荒々しい攻め方である。

(やべえ、何考えてたんだ俺は！ここはリングの上、一瞬の隙で試合が決まるんだ。それがプロであればなおさらそうだ。集中しろ！もつと神経を集中させるんだ！)

(よし、このまま一気に攻めていけば勝てる)

なおも攻めるスバルだが、左のストレートを避けられ、そこから竜児が反撃へと移った。右のジャブから左のジャブのワンツールのコンボからジャブの連打、さすがのスバルもガードをするしかなかったが、一瞬あいた顔面に竜児の右ストレートが当たるかと思いきや

カンッ！

ゴングが鳴り1ラウンドが終了。両者リングへと戻って行った。

「兄さん！ タオルです」

「エリオか、ありがとよ」

（ふう、やっぱり5年なんて空きすぎたな。魔導士としての任務とかでの経験を差し引いてもやばいな。でも、やっぱりぞくぞくする。帰ってきたって感じる。この四角い荒野にな！）

竜児は知らずと笑みが出ていた。

「兄さん？」

「ん？ ああ悪い。さあ2ラウンドへと行きましょうか」

2ラウンド開始と同時に竜児は特攻を仕掛け1ラウンドとは全く逆の展開になった。だが一つ違うのは竜児の攻め方は左を基本とした攻撃のコンビネーションであるということである。ジャブからのストレートフック、隙あらばボディーと多種多様に攻撃を繰り出す。スバルも負けじと手を出すが竜児に避けられてしまう。

（スバルのパンチはもらうと確実にやばいな、だが間合いがちゃんとしてない分避けやすいし、当たってもさほどダメージは少ないはずだ）

竜児はさらに回転数を上げていく。そしてスバルが徐々にガードを上げてきて腹部があいてき所に

（そこだ！）

竜児は思いっきりボディブローを決めた。

「クッ！」

スバルが顔をしかめて一瞬倒れかけたがギリギリ耐えた。だがそこに追い打ちをかけるようにストリートを喰らわせようとする竜児

(もらった！)

そう思っていたが。スバルもそのパンチを待っていたかのようにあわせてきた。

(ここだあー！)

(何！？)

所謂カウンターパンチである。これを決まれ試合の流れは確実に変わる。

「うおおおおおー！！」

2人は自分が先にパンチを決めようとして雄叫びのもとパンチを繰り出したが……

カンッ！

『第2ラウンド終了です』

リーヴの声とともに2人のパンチはギリギリのところまで止まった。

「……………」

2人は無言でコーナーに戻っていくが

(竜児がこんなに強いなんて、思ってもいなかった。次のラウンドは私からいかないとやられる)

(スバルの最後のカウンター、あれは相当な練習か相手の攻撃タイミングが分かっただけでできないはず。本能か？ いやそれよりもあの身を削るような緊張感、あの頃とほとんどいやそれ以上か？ なんにしても感謝するぜ)

3ラウンド目、スバルは自分の思うとおりに速攻を仕掛けるが、行かなかった。いや、行けなかったといった方が正しいであろう。試合を見ているものにはなぜスバルがいきなり止まってしまったのか分からないものもいた。

「なぜスバルさんは止まってしまったのでしょうか？」

「分からないわ。でも、あの子は本能的に動くこともあるからね」

エリオとティアナはそう話していたがスバルは

(な、なんなのこのすごいオーラは、行ったら確実にやられる！  
そんな嫌な予感しかしない)

その竜児が出している圧倒的オーラに気づいていたそして

(む、このオーラは!?)

「なのは！ この試合を今すぐ止める！」

「え!?! う、うん。2人ともすぐに試合をやめて！」

シグナムがこのオーラに気づき危険と察知したのか、なのはに言って試合を止めさせた。よってこの試合は引き分けとなった。

その夜、竜児は1人走り込んでいた。そこに

「どうだ、試合の感とやらは戻ったか？」

1人の男性が声をかけてきたが

「え、えっと、どちらさまでしょうか？」

竜児にはその人物が誰かはわからなかった。

「む、この姿では初めて会うな。私はザフィーラだ」

「え！ ザフィーラさんですか!？」

竜児が驚くのも無理はない。何せ狼？ 状態のザフィーラにしかあつていないのだから。

「フ、まあ良い。普通に接してくれ」

「は、はあ。じゃあそうするわ」

ザフィーラが座り込みその隣に竜児も座る。

「お前は酒は飲むのか？」

「いや、ボクサーだから飲酒は控えてる」

「そうか。それでは、お前は今日の試合どう思った」

「試合か…まあかなり感覚は戻ってきたよ。でも」

「でも？ なんだ？」

「まだまだだと思う」

「まだまだだと？ 俺はそうは思わんのだがな。特に最後のあの勝負気は異常だったぞ」

「そうか？ だが技術面じゃ世界には程遠いな。まだプロにもなっ

てないし、それに強くならねえと」

「そうか、お前がそういうのならそうなのだろうな」

そう言うとザフィーラは立ち上がり

「今度から俺も付き合おうか？」

と言ってきた。

「いいのか？」

竜児はそう聞くが

「ああ、強くなりたいのだろう？ それは俺とて同じだ」

「じゃあ、これからちよくちよく頼むぜ。ザフィーラ」

「ああ」

そういって2人は握手をし、ザフィーラは見回りへと戻って行った。

辺りが再び静かになったときに竜児は

「もっと……強い奴と戦ってみた」

そうつぶやき自室へと戻って行った。彼の影がひそかに動いたのにも気づかずに

## 第16・5話（後書き）

今回の話は童児はのブランクを戻すこととザフィーラさんを出すために急遽考えたものです。もしかしたらggdggdになっていたかもしれないませんがご勘弁ください。

次回はちょっとしたコラボです。あるサイトの四コマ漫画として出てくるキャラが出ます

作者はその管理人さんの許可をもらっております。

お楽しみに！

## 番外編（前書き）

今回は番外編です。マーシ先生！許可をくださりありがとうございます  
いました。今回奴が出ます。

？「ぴよっっ！」

## 番外編

今この六課のロビーには何人かの人物がいる

「ねえ、ほんとに出るの？」

「でるらしいよ〜なんか最近そんな噂が立たないからね〜」

「まあ、なんにせよその正体を見破るのが今回も目的だからね」

「そうや！ あんなことした犯人を必ずとっつかまえたる！」

「何で俺までこんなことしなきゃならねんだよ」

上からティアナ、スバル、アリサ、はやて、竜児の順で話していた。しかもこんな夜更けに。なぜこんなことになったのかというところ最近ある噂が絶えないのである。その噂が

”この機動六課に幽霊がいる”

という噂だ。例えば調理室の材料がなくなっていたり。六課人員の部屋がなぜか荒らされていたり、しているのだ。そしてそれを目撃し追いかけた隊員もなぜか部隊長室付近で見逃すという。しかもある1人の隊員によればその姿たぬ…もといはやてに似ているのだとか。

「なんか今狸って言いかけたやろ！」

なんのことやら。

「まあええわ。そんなことよりこれが私の仕業やないことを証明したる！」

とまあこんな感じで意気込んでいるようだった。

まあそんな感じでやってきたのが部隊長室である。さすがに夜であることもあつて不気味な雰囲気が漂っていた。そんな中

「ね、ねえほんとに、ゆ幽霊…なんなんてい、いるのかかしら」

ティアナが若干強気に言ってるように言っているが体全体が揺れている。それを見たスバルが

「ティアナってもしかして幽霊とか苦手なの？」

そう聞いてくるが

「そ、そんなわけないでしょバカスバル！」

一蹴されてしまった。強がりと言ってるのが丸見えだが…

「まあそれよりも幽霊とかいると思うか普通？」

「さあ、わからないわね。はやてに似ているとか言われてるけど本当かしら？」

「そんなことあらへん！」

「まあ、扉を開けてみればわかることだ。いくぞ」

竜児がそういつと皆つばをぐくりと飲み込み頷いた。そしてドアを開けるとそこには！

ビシッ！

なんかそのバツク音がとてつもなく似合いそうなポーズではやてに似たたぬきがいた

「……………」

「……………」

プシュー

竜児たちはとつさの出来事に何が起きたのかを理解できずにドアを閉め、目をこすつてもう一度ドアを開けると…

ビシッ！

やはり両手を上に挙げたポーズをしてたぬきが立っていた。

「…なあ」

「なによ？」

「これ、はやて…だよな？」

「え、ええそつ、よね？」

「まあ、部隊長に見えますが…」

「私にも…見えます」

竜児たち4人はこれがはやてだと肯定するが

「ちょっと待てええええええええええええい！！！！」

それをはやてが否定はじめた。

「これが私に見えるか！？ こんなたぬきが！」

「なにいつとんのやー、たぬきは八神はやてやでー」

「そうそうあいつは私…なわけあるかああ！ ていうかしゃべるとるし！」

他の3人もためきがしゃべっていることにはびっくりしているようだった。

「まあ、それよりも」

ちよつとした（はやてにとつてはそうではない）騒ぎがあったが何とか落ち着いて最近の騒動事件について聞いていた。

「最近の騒動についてはあんたがやったことなの？」

アリサがそういうと

「騒動ー？ なんのことやー？」

「あんたが六課の食料勝手に食ったり同員の部屋を荒らしたり、休暇を勝手にいれたり、更には女性同員の胸を勝手に揉んどつたことやー！」

はやてが追及するとためきあー、とうなずき

「確かにそれ全部ためきがやったことやー。でも悪戯したかったわけやないでー」

「でもあんたのせいで私がどれだけ誤解されたかわかつとるんか！」

はやては鬼のように叱っていくが

「まあ、部隊長。別にあの部…いやたぬきも悪気があったようには見えませんし」

スバルがそうなだめるが

「スバル！ 今あれのこと部隊長って言いかけたやろ！ 言っとくけどあれは私やないで！」

「なにいつてんのや〜」

「やかましいわい！」

そんな2人のやり取りを見て

「なあ、あれってホントにはやてに似てるよな？」

「まあね、そっくりじゃない」

「そうですよね、あはは」

「竜兄もそう思いますか」

4人はそれぞれの意見を出していく

「その4人聞こえてるでえ。これ終わったら視力検査いや脳内検査でもしてもらおうか？」

「いやそんなこと言ったって、お前ら並んでたら区分けつかないぞ」

竜児がそう言うが

「ちょおまちい、私のどこにたぬきの耳と尻尾がついとるゆうんや？」

はやてが聞いてくるが…



今日一番の突込みが響いたのはゆうまでもない。

番外編（後書き）

作「…」

た「…」

は「…」

「お前らに聞こう。日常で当たり前にすることは？」

「胸を揉むこと！（キリ）」

「はい、お前ら同一人物実確定！」

「ちよつと待てなんでやねん！」

「だつてお前ら息が合いすぎかつすることも一緒ってもう双子かなんかじゃねえか！」

「なんでや！ 私には尻尾とかあらへんで！」

「いやいやお前も心眼でよく見てみると尻尾や耳が見えてくるしアンケートを取ったところ」

はやてとたぬきは同じである：100%

そうではない：0%

「ほらみる」

「ほらみるちやう！ ひとつつたんやそんなアンケート！」

「まあいろいろと…」

「いろいろつてなんや」とんとん「なんや！」

「これからもよろしくなー」

「よろしくちやうわー！ つつか帰れ！…！」

マーシさんたぬきはこんな性格でよかったですでしょうか？ 意見があるならば感想をください。では次回もよろしくお願ひします。

## 第十七話（前書き）

今回竜児がユーノを説得させますつまりユーノ×なのはフラグの第1歩をつくります！

…恨めしい

## 第十七話

「おい新入り！　そこが済んだらこっちの清掃も頼んだぞ！」

「はい！　分かりました！」

俺は今、ホテル・アグスタという場所で清掃アルバイトを行っている。それはなぜかというと

作者 side

「はやて…もう一回言ってくれないか？」

「だから、竜児君にはホテル・アグスタで清掃員のアルバイトをしてもらって言ったんや」

遡ること2日前竜児は部隊長室に呼ばれて行ってみるとはやてにいきなりこのことを言われ啞然としていた。

「何でいきなりそんなところに行かなきゃいけないんだよ。しかも清掃のアルバイトって」

竜児がはやてに理由を聞きだすと

「実はな…2日後にそこで骨董品オークションがあるんや。それで

私たちはホテルの警備をせんといかんのやけど」

「ん？ それならわざわざ俺をそっちまで連れて行かなくてもいいだろ。お前らなら普通に対応できそうだし」

「まあそれもそうなんやけど、もしもってこともあるやろ？」

「もしもってなんだよ。まさかその出品されるものが盗まれたりしないように見張らせるためか？」

「お、理解が速くて助かるわ。ということをお願いな」

「なにがということで、だ。俺はまだ「あ、もう履歴書とかは提出しとるからな」……やっぱお前狸以外の何でもねえな」

そういうことで竜児はアルバイトといった面目のもと見張りを任せられたのである。

竜児 side

ふう、今思い出してもってだめだな。苛立ちついてたらますます収集がつかなくなっちまう。ここははやく終わらせて

「あの

そう思っていたが後ろから声がかけられたので俺は振り向いてみた。

「あの、真田竜児二等陸士ですよ？　なのはたちから話を聞いておりますよ」

「え？ あの、どちら様でしょうか？」

「あ、僕はユーノ・スクライアといます」

「ユーノ？ あっ！なのは隊長から聞きましたよ。隊長が魔法に出会うきっかけをくれた人って」

「敬語じゃなくてもいいよ」

「あ、じゃあまあ、ユーノは何でここにいますか？」

俺はユーノにここにいる理由を聞いた。

「僕は明日行われるオークションの司会を任されたんだ。だからね」

「ふうん「おい、なにしてるんだ！」っと早く終わらせなきゃ。じやあなユーノ」

「うん」

そう言って俺はその場を離れた。

作者 side

そして本番当日、機動六課の面々やその他の隊員たちがアグスタの周辺の警備に出ている中竜児は

「ふう、ここもあらかたきれいになってきたな」

【そうですね、マスター。次は、っ！】

「どうした？」

【マスター、魔力反応です！】

「そうか、まあスバルたちやザフィーラ達もいるから粗方は大丈夫  
そうだが」

そう言っつて竜児は掃除を続けていった。だが

【マスター、こちらに向かってくる魔力反応があります】

リーヴの一言によりそれは遮断される。

「まじかよ。おいリーヴその魔力反応がどこに向かっているかわか  
るか？」

【はい、少し待ってください………出ました。ここの地下駐車場です  
！】

「わかった。いくぜえ！」

そう言っつて竜児は素早くその場から地下駐車場へと向かった。

その地下駐車場では1人（いや1匹の）召喚獣らしきものが1つの  
車の荷台にあるものをあさっていた。その物音にさすがの警備員が  
気付き近づくも

「あれ？」

そこには誰もいない。しかし

「リーヴ！　ここで間違いないんだな！」

【はい、マスターそのままですぐ行って思いっきりパンチしてください】

突如響き渡った声にその者は気付いてその方向を見ると

「オツケー。ならリーヴ」

【ソニックムーブ】

ソニックムーブでの高速の移動で一気に近づき

「おりゃああー!!」

その声を上げてその者に拳を叩き込む。これにはステルスも解かなければならないが

「……」

「ちっ、瞬時にガードしやがったか」

竜児はそう言うと再び戦闘態勢に入るが、

「……」

そのものは何も言わず首を下げてただけでその場を逃げ出した。

「くそ、逃げられちまったか」

「あの、あなたは？」

「あ、機動六課所属って言っているのか？　まあ真田竜児です。大丈夫でしたか？」

「は、はあ私は大丈夫ですが……」

「ならいいか。じゃあ俺は残している場所の清掃に戻りますので」

そう言っただ竜児はその場を離れた。その時に

「なあリーヴ」

【はい、なんででしょうか？】

「あいつ召喚獣だったか？」

【まあ、間違えなくそうでしょう】

「魔力反応なんか記憶してるよな？」

【はい、していますが】

「そうか」

本人は冷静に聞いていたが本心では喜んでいた。ようやく手ごたえのある奴と出会えた。

その後すべてのアルバイト過程が終わり竜児が外に出るとそこにあつたのはガジエットの残骸とそれを調査している面々。そしてユーノとなのはが楽しく話している姿を見つけた。竜児は何を考えたのか  
念話で

《ユーノ》

《竜児？》

《話がしたいんだ。なのはとの話が終わったら来てくれないか？》

《分かった》

そう伝えて竜児は人目のつかないところまで移動をした。数分後ユ

「ノがやってきて

「何の用だい？ 竜児」

そう言ってきた。

「まあ、長々と話す必要もないから単刀直入に聞け。お前、なのはのことどう思ってた？」

ユノ side

真田竜児二等陸士。なのはから名前は聞いたことはあった。魔導士ランクも魔力も低いけれど特例か何かで機動六課に配属された人だと。僕は最初どんな人だろうかと思っていった。

そして昨日、その真田竜児に会うことができた。性格は少しばかり楽観的かな？ 僕の中の何かを見られてる感じがした。その竜児が聞いているのは僕がなのはをどう思っているかということかということ。なのはは僕にとっては大事な幼馴染であり恩人だ。でもなのはがいなきゃ僕はここまで来れなかったのも事実だろうし、何よりなのはは笑っていた方がかわいいいなあって僕は何を！

「おっ、その反応は気にかけてるって反応だな」

竜児は僕の動きを見てそう言ってきた。やっぱり僕はなののが……でも

「でも、あれは僕のせいで起きたんだ。僕はなのはを愛する資格なんてないよ……」

「あれ？ あれってなんだ？」

「え？ 知らないのかい。そうか、それは僕が言うことじゃないし本人が言うまで待つてあげてくれ」

あの日の出来事を竜児に話そうかと思っただけけどやめた。あれは簡単に話していいものじゃない。

「まあ、言いたくないならそれでもいいが、お前はなののはのパートナーだったんだろ？ パートナーなら相手と最後まで支えあって共に歩き続けるのが筋つてもんだろ。その歩みを途中で止めちまったらそれまでのことが全部意味なくなっちまうぜ。」

僕は顔を下に向けていたが竜児の言葉を聞いてとっさに顔を上げた。でも竜児はすでに背を向けて歩いていった。最後に念話で

《頑張れよ》

そう言い残して。

（ありがとう、君のおかげで忘れていたことを思い出させてもらったよ。僕はなののはのパートナーなんだ！ また歩けるかわからないけど1歩ずつ進んでいこう）

そう心に決めて僕も帰って行った。

第十七話（後書き）

作「ユーノ」

ユ「なんですか？」

「セツトOK」

竜「って何しとんじゃバカ作者！」

バコツ！

「ぐへっ、何すんじゃ竜児離せ！ あのリア充を撃てないじゃないか！」

「やめい！ そんなことしたら100%殺られちまっぞ」

「誰に…だ!？」

(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ)

「な…なのはさん」

「なにやってるのかな？」

「いえ！ なにもしておりません！」

「そっか。ならいいんだ。ユーノく〜ん？」

「…次回もお楽しみください」

## 第十八話（前書き）

ようやく投稿です。今回は竜児とティアナが対決します。



竜児 side

「ッ！」

俺は寝心地が悪くなったのかその場を飛び起きた。今は個室が準備できたと言ってそっちに移動して使って久しぶりにぐっすり寝れるかと思っただが

「くそ、なんだって今さらあんな夢を見なきゃなんねえんだよ」

よりもよってあの時のことを夢に見るなんてな。

【マスター、大丈夫ですか？】

リーヴが俺のことを心配して声をかけてくれたが

「リーヴ、ああ大丈夫だ。ちょっと走ってくるわ」

【分かりました】

俺は問題ないと答え六課の周りを走ることにした。

しばらく走っていると俺はなぜか腕を組んでどこかを見ているヴァイスに会った。

「お、竜児じゃねえかどうしたんだ？」

「俺はただ寝付けねえから走ってるだけだ。お前こそどうしたんだ？ いったい」

俺は言いかけた言葉をヴァイスが親指で指した方向を見て言うのをやめた。なぜなら

「あれってティアナじゃねえか。確か今日の午後の訓練はなかったはずだろ？」

ヴァイスにそのことを聞くもヴァイスは首を振り

「俺も言ってみたんだがな…まったく聞く耳なしさ。どうやら自分が皆に追いつくにはあれくらいやらないとだめらしい」

「あれくらいって、なあ、今日なんかあったのか？」

俺はヴァイスに今日ティアナに何かあったのかを聞くことにした。

ティアナside

「ぶっ…」

私は今やっていた射撃練習をやめて一息ついた。

（私の周りには天才と歴戦の勇者ばかり。隊長格全員がオーバーSランク。副隊長でもニアSランク。あの年でもうBランクを取っているエリオと、レアで強力な竜召喚士のキヤロは2人ともフェイトさんの秘蔵っ子。危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップがあるスバル。やっぱり…うちの部隊で凡人なのは私だけか）

そう思っても分らない人がいる。それが竜児さんだ。竜児さんは魔導士ランク・魔力がともDと言っていたが六課に所属している。なのは隊長に理由を聞いてもそれはなぜだかわからないという。だけど

（だけどそんなの関係ない！ 私は立ち止まるわけにはいかないんだ）

そう決心して再び練習に戻ろうとすると

「よ、まだ練習してたのか。今日の午後の訓練は無かったはずだろ？」

竜児さんがそう言ってやってきた。

「竜児さん、何の用ですか？」

少し苛立っていたのか私はそれに冷たく対応して再び練習に戻ろうとすると

「ミスショット。したんだってな。ヴァイスから聞いたぞ」  
「っ！」

今回のことを聞かれると私は少し嫌な気分がしてしまい

「だから、なんだって言うんですか？　もしかしてあなたも練習をやめるなんて言うんじゃないんでしょうね？」

竜児さんに冷たく当たってしまった。そんなことをしても意味がないと知っていたのに……でも

「いや、体を労わるのは大事だが何も練習をやめると言ってるわけではない。ボクサーでもオーバーワークは普通だからな。それよりもお前、今かなり焦ってるだろ？」

「焦る？　何がですか？」

焦っている。そう言われても私自身にはてんで分からなかった。

「強さにさ。お前は何のために強さを手に入れようとしてるんだ？」  
「私が強さを手に入れたいのは、ランスターの弾丸の強さを証明するためです」

私は力強くこう答えた。でも強くなっている気がしない。そしたら

「ふうん、でも今のお前だったら俺でも勝てるぞ」

竜児さんがこう言ってきた瞬間私は頭にきてしまった。

「聞き捨てならない言い分ですね。竜児さんでも勝てる。ですって？ おもしろいじゃないですか。だったら勝負しませんか？」  
「いいぜ、勝負は1週間後だ。それでいいな？」  
「いいですよ」

私は竜児さんにそう言って自室に帰って行き竜児さんも帰って行った。その時ビュツと強い風が吹いた。

1週間後、訓練場には2人の人間がいた。竜児とティアナの2人だ。周りには他のFW陣やなのはら隊長陣や副隊長陣もいる。フィールドの中央ではルール確認が行われていた。

「ルールは簡単、気絶するか降参したら負けだ。わかったな」  
「わかりました」

竜児がそう言ってティアナが了承すると

「じゃあ、スタートだ！ リーヴ」  
「クロスミラージユ」  
「セットアップ！」

2人がデバイスをセットアップさせると同時に模擬戦が始まった。

「クロスファイア！ シュート！」

ティアナの周りに出てきた複数の弾丸が竜児を襲う。竜児はそれを

「リーヴ！」

【ソニックムーブ】

それにより瞬時にその場から移動しティアナに思いっきりストレートを放つが、それは避けられティアナに銃で牽制されつつ距離を取っていく。

「チツ、さすがだな」

そう言いつつ竜児はさらにティアナとの距離を詰めるために歩き出す。一方ティアナは

「くっ、さすがにあれを喰らうのはまずいわね。こっぴごうなら…」

何か思いついたのか、もう一度竜児の前に出て

「クロスファイアシュート！」

もう一度クロスファイアを放つ。だが

「またか2度も効かねえぞって、うお！」

それは竜児本人を狙ったものではなく、竜児の周りを狙い煙幕を起すために撃つたものであった。

チュドドオオオン…

「ケホツケホ…たくなんだってんだっ!？」

煙から目が慣れて竜児がティアナを探すとそこにはフェイク・シルエイトによって作り出された2体の幻影ともう1人いた。そして竜児にクロスミラー・ジユを構えて自信ありげにこういった。

「チェックメイトですね」

「へ、やるじゃねえかティアナ」

その行動には観戦していた他のメンバーも驚いていた。

「まさかティアナがこんな作戦を取ってくるとはね」

「うん、私も驚いてるよ。これはもう終わりかな」

フェイトとなのはの言葉に他の面々も肯定しそうになる。だが

「いや、まだ分からんぞ」

「どういうことだ？」

シグナムの言葉にヴィータが理由を聞いてくる。

「あいつは…真田は私と戦った時もそうだがまだ私たちに隠している力がありそうだな」

「力を隠している？」

その理由にスバルが首をかしげた。

「いや、ただの勘だ。騎士としてな」

シグナムは再びそう言って視線を竜児たちの方へ戻した。

フィールドでは3人のティアナがクロスミラージュを竜児に突き出していた。

「これで終わりですね竜児さん」

「ふ、どうかな。俺はまだ降参もしてなければ倒れてすらねえぞ」

「これからそうなることなので心配は無用です！」

ティアナはそう言って半歩後ろに下がり竜児に向けて6発の銃弾を放った。だが

「いくぜ、スペシャルローリングサンダー！」

その言葉を言ってたから約0.02秒間の間で5発のパンチと右ジヤブ1発ですべての銃弾を打ち消してしまった。そしてティアナに向かって

「さあ、なのはに教えてもらったことを俺に見せてみる！」

と叫んでいた。

そこからの勝負は圧巻であった。竜児はティアナの銃弾を己の拳のみで打消す、避けるなどを駆使して全て捌いていた。もはやそこに

は魔力や魔導士ランクなどの壁はないように感じさせられていた。

「ふうふう、さすがだなティアナ。やっぱつええわ」

「そうですか？ 私は教えてもらったことをしているだけですから」

「おいおい、それがどれだけ難しいことかわかっているのか？ それができるお前は間違いなく天才だよ。だから、俺の力の一部を見せてやる」

そういうと竜児はファイティングポーズをとるのをやめて腕をだらしと下げて無形の状態を取った。

「さあ、撃つてこいよ」

「どうなっても知りませんよ」

ティアナを挑発してわざと弾を撃つようにせかしそれに応じたティアナも銃弾を放つが

シュツ

「な…消え、「終わりだ」…ガハツ」

まるで銃弾が竜児の体をすり抜けたように見え、ティアナが驚いている間にボディブローを決め気絶させて模擬戦が終了した。

「はあ、はあ、終わったか」

「お疲れ様竜児君」

セットアップ状態を解き落ち着いた感じの竜児になのは近づきそうだった。

「なのはか、ああとりあえずティアナを医務室へ連れてってやれねえかな？」

「わかったよ」

「それと」

そして竜児は

「それと…教えてくれ。ティアナがあんなにも強さに固執している理由を」

「……分かったよ」

ティアナが強さに固執していた理由を聞くことにした。

「でもなんで？」

「いや、それは…なんか似てたからな。昔の俺に、って！ 気になるからな。同じ部隊にいるものとして」

なのはに理由を聞かれたが竜児はどもった声で言いそれをはぐらかすようにした。

「ん？」

なのはも不思議がっていたが特に気にしていないようだった。

俺はあの後ティアナをなのはに医務室へ運んでもらってから話を聞いた。

「亡くなった兄の夢を果たすために、か」

なのはの話によるとティアナの兄ティード・ランスターが任務中に亡くなりその兄が侮辱されたのが悔しくて強さを求めていったということだ。しかし

「管理局ってのは馬鹿ばかりなのか？」

「竜児君そんなこと言っちゃ」

俺の言葉になのはも反論しようとするが

「だってそうだろ。死者を冒瀆するようなことなんかあってはいけないことだ。自分たちが正義だから何でもやっついていいと思ってないかこの組織はよ。ふざけるなって感じがするぜ」

俺の言葉によって反論するのをやめた。

（なのはにも思うところはあるんだな。だけど、ティアナの無茶を知っておきながら何も言わないってのはどういうことだ。それもおかしく感じてしまう）

「ま、ありがとな。それを知って俺も安心したよ」

俺はそう言ってその場を後にした。内心では怒りを抑えながら。

ティアナside

「……ん？ あれ？」

私は医務室のベッドに寝ていた。

「そうか、私」

負けた、竜児さんに……その事実だけが鮮明に残されていて

「なーんかすつきりしたって感じがするのよね」

「あら、何かいいことでもあったの？」

「シャ、シャマル先生！ いや、これはその」

（やば、さっきの言葉聞かれちゃったかな？）

私はそう思いつつも冷静さを保つようにする。

「ところで今何時ですか？」

「今は9時すぎよ。凄く熟睡してたわよ。死んじゃったんじゃないかと思うくらい」

私そんなに寝ちゃってたのか。

「最近ほとんど寝てなかったでしょ。その疲れが溜まっていた疲れがまとめてきたのよ」

そうか、そうよねと思いつつも立とうとした時…

ビーー！！　ビーー！！

「警報！？」

「とりあえず、へりの方に向かしましょう。ティアナちゃん、肩、貸してあげるわ」

「あ、もう大丈夫ですから」

すでに十分な休息を得た私は、しっかりと両足を地に付けて立つ。そして急いでへりポートに向かった。

へりポートではすでに隊長陣とFW陣が集まって任務の説明が行われていた。だがその最中に

「なあ、その任務は俺1人で行くぜ」

「……え！？」「」「」

竜児が自分が任務に行くと言い出してきた。周りはかなり驚いていたが

「部隊長にも許可は取ってきてある。それにあんたら、特になのは話さなきゃならないことがあるだろ?」

竜児はそう言っへりに乗り込もうとした。最後に

「それとティアナ」

「はい?」

「見せてやるよ。俺の力をよ」

そう言い残しへりへと乗り込んだ。

## 第十八話（後書き）

次回、竜児が更なる力を見せつけます。そして過去話をする。

第一九話（前書き）

かなり遅れてしまい申し訳ありませんでしたああああああああ  
ああああ！

しかも過去話し書けてねえし！  
でも一応区切りいいところまで行けたしいいかな…

それでは本編をどうぞ！

## 第一九話

竜児が任務へと出向く前…

「はやて！ いや部隊長！」

竜児ははや…たぬき部隊長（笑）の元へ駆け付けた。

「誰がたぬき部隊長（笑）やてえ！」

「あの、はやて？ 誰に言ってるんだ？」

「ん、ああすまんわ。竜児君何の用や？」（あの作者、後で覚えとれよ）

はやてがなんかなんか思っているがそこは気にしないことにして、竜児は真剣な顔をしてこう言った。

「この任務、俺1人で行かせてくれ！」

「え！？ でも竜児君魔法使えんゆうとったやんか。それでどうやって戦う方法ならある」え？」

はやてが言った言葉を竜児が遮り更に

「それに、ちょっとティアナが心配だな」

「ティアナが？」

「ああ、あいつは今自分には力が無いんじゃないかっていう葛藤があると思うんだ」

「え？ それは…」

はやても納得しそうではあった。

確かにティアナの兄が殉職し、周りから罵倒されてその周りを見返すために努力してこの六課にも入ってきたのだが、練習は基礎の繰り返しばかりで自分が強くなったのかさえも分からない状態のままであり、更には前回の任務で悪意はなかったがミスショットが生まれてしまった。彼女の今の状態は精神的にかなりきついものと言ってもいいだろう。

「なのは達もティアナのことには気が付いてたんじゃないのか？」

「そ、それは、そうやるうな」

竜児の問いかけに頷くはやて。

「それなのになんでなのは達はティアナに一言も声をかけてやらな  
いんだ？ おかしいだろ?!」

「そ、それは…」

「そう、ここで俺がはやてに何を言っても意味がない。でもあいつらは1度ちゃんと話しておいた方がいいな。その場を作るようはやても言っておいてくれ」

「うん、分かったわ」

竜児に言われたことにははやてはたじろ見ながらも頷いた。

「ま、俺も人に何かを教えたり導いたりなんてしたことがないから、  
そんな偉そうには言えないけど、人1人の心も救えないようじゃ、  
教導官だの隊長だのと言えないんじゃないか…」

そう言いながら竜児ははやての元を後にした。

「あ、そうだ！」

「ん、まだなんかあるんか？」  
「それとユーノをここに呼んどいてくれ。あいつが何を言おうとも  
必ずな」

振り返ってはやてにユーノも呼ぶように頼みその場を後にした。

竜児 side

「……………」

現場へと向かうへりの中俺はある考え事をしていた。

(力…か…)

「どうしたんだ竜児。お前まさかビビったとか言ってるじゃねえだ  
ろうな」

「ヴァイス、いやビビるとかそんなもんはねえよ」

「そうか？ お前1人で行くなんて言った時はさすがの俺もびつ  
くりしたが本当に大丈夫なんだろうな」

「はっ！ 何言ってるんだ、魔力とかランクとかですべて決まるわけ  
じゃねえんだ。それを今から見せてやるよ！」

そうだな、今は考え事してるよりも目の前のガジェット共の掃除  
としゃれ込みますか！

「行くぜリーヴ、あれをやるぞ」

【大丈夫ですかマスター、あれをすればさすがに言い訳などはできませんよ】

「いいんだよ。今使わなきゃ使う時なんてこの先来るかもわかんねえ代物なんだからよ」

そうさ、こういう場合に使うんだもんな固有結界あれはよお！

「おい竜児！ ハッチを開くぜえ！」

「おう！ 行くぜリーヴ！」

【はい、マスター】

「リーヴ、セットアップ！」

俺はリーヴをセットアップさせバリアジャケットを装着しヘリのハッチから飛び降りながら詠唱を始めた。

我、拳の道を極めんとするもの。

血潮は魂で、心は闘士。

幾たびの闘いを越えて不敗。

ただ一度も敗者に屈せず

ただ必死に昇り続けるのみ。

彼の者は常に独り四角い荒野で勝利を目指す。

その先が孤高になるとしても。

彼の者は四角い荒野に立ちづける。

「<sup>リング</sup> 孤高の決闘場」

俺の詠唱が終わると周りが海だったのが一変してボクシングリングが展開されていた。これが俺の固有結界だ。そして飛び降りた勢いそのままに

「ハリケーン・ボルト！」

D O K O O O O O O M ! !

ハリケーン・ボルトを放ち1機のガジェットを粉碎した。

「ここは俺とお前らしかいないリングだ。機械が言葉を分かるかはわからねえが、てめえらまとめてかかってこい！」

さあ、おっ始めるとしますか。この戦いをよお！

ティアナside

「 凄い、なんなのあれ、EXランクを計測しているなんて…」  
誰が言った言葉かはわからなかったが確かにすごいと思ってしまった。竜児さんがへりから飛び降りて何かつぶやいているように見えたけど、それが終わった瞬間に周りの海がすべてリングに変わっているなん  
て…それだけでもすごいのに竜児さんはガジェットをパンチだけですべて粉碎している。魔力なんて関係無しに。

「ねえ、ティア！ 竜兄ってあんなに強かったんだね！ 私知らなかったなあ」

「え、ええそうね」

スバルが私に興奮した様子で話しかけてくるけれども私は曖昧にしか返事ができなかった。

「あいつ、あんな力を私たちに隠してやがったのか。帰ったら詳しく聞かねえとな。な、なのは」

「……」

「なのは？ おーいなのはー？」

「え！ あうん。そう…だよね」

ヴィータ副隊長がなのはさんに声をかけていたけれどもなのはさんも曖昧にしか対応できていない。何かあったのだろうか。

「ねえ、皆。竜児君が無事この任務を終えたら話したいことがあるんだけど、いいかな？」

話したいこと？ なのはさんの話したいことってなんなのだろうか？

「……は、はい！ もちろんです！」「」「」

とりあえず私達は意味も分からずに返事をしてもう一度モニターの方へと顔を向けた。

「そおら！ おりゃあ！ どりゃああ！」

そう言つて繰り出されるパンチは確実にガジェットを捉え続け破壊していった。

「リーヴ、残り何機だ?!」

【残り10機です！ マスター】

「10機か、相手さん方は確実にこっちのデータを取るために来てると思うが、おもしれえ受けて立とうじゃねえか。データを完ぺきにとれるもんならとってみなあ！ スペシャル・ローリング・サンダー！」

竜児は魔力で強化した足で一気に加速し一瞬にてガジェット5機を破壊し

「続けてJETアッパー！」

JETによりさらに1機

「ブーメラン・フック！」

ブーメランの威力に巻き込まれた3機、そして

「これでラストだ！ ギャラクティカ・マグナム！」

BAKOOOOM!

マグナムで最後の1機を粉々に粉碎して終わらせた。

「ふう、何とか終わったなあ」

【はい、ですがマスター】

「ん？ なんだリーヴ」

【ここは元々海の上。これで固有結界を解いたらマスターは】

全てのガジェットを破壊して落ち着いていた竜児にリーヴがそう申告した。

「…………やべえええええええ！ 俺飛行魔法できねえじゃん！ どうしようリーヴ！」

【まあ、私は水圧機能がありますので水に浸かっても大丈夫ですが】  
「俺は大丈夫じゃねえよ！ ってあ」

そんな話をしていたら固有結界が解けてしまった。なので竜児は

「ああああ落ちるつつつつつつ！」

そのまま海へダイブである。

【きれいに落ちオチが付きましたね、マスター】  
「誰がだれががうまいうまいことを言えと言ったあああああ！」

ザブン…

## 第一九話（後書き）

は「作者…」

作「なんでせうか、はやてさん」( )( ) 。 。 ( )( ) ( ) ガクガクブルブル

「何でこんなーに遅くなってるんやろうかねえ、更新が」

「文章作るのがって大変だねえ」

「そつやねえってちゃうわ！ しかもなんやうちの扱い！ たぬき部隊長って！」

「本当のことじゃないか」

「…否定したる！ そんなこと否定したるでえ！」

フェ「まあまあ、はやて落ち着いて」

「フェイトちゃん！ 何でここにおんねん」

「俺が呼んだ」

「なんでなん？」

「ヒロイン候補のアンケートで今フェイトが2票で1位だから」

「…そうなんか、なんかフェイトちゃんって他の方の小説でもヒロインにあがつとるよな」

「そうだな、フェイトって純情だし」

「一途そうやし」

「胸でかいし」

「そこ一緒に言うことなの!？」

その後フェイトや胸の談義を始める二人…

「まあいいか、えつとまだまだヒロイン要望や強化させるかどうかのアンケートは受け付けるようです。詳しくは第十二話のあとがきをご覧ください。それと竜児の固有結界については主人公設定「改」の方に詳しく記述させられてますのでそちらの方も見ていてくだ

さい。それではまた次回」

「だから胸はでかい方がやな」

「何を言う貴様は貧乳＋幼女と言う抜群の破壊力を知らぬと申すか」

あーだ、こーだ

「…はあ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6669s/>

---

リリカルなのはStrikerS 己の拳にける道

2011年12月13日02時08分発行